

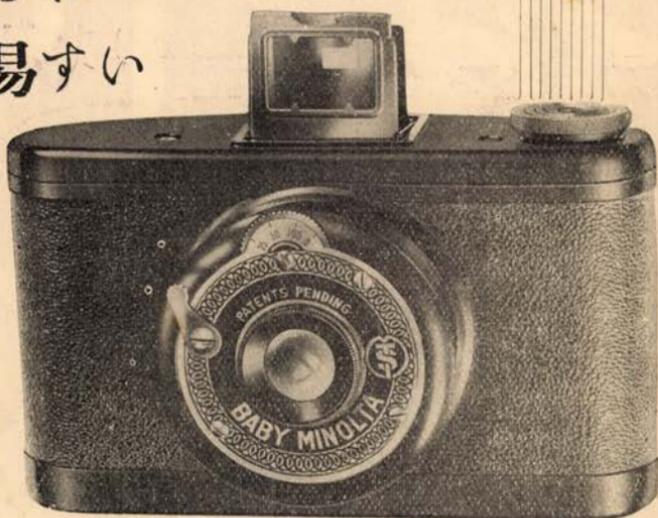
麻生路郎★編輯

川柳の
雄姿

NO. XI VOL. XIII

手に軽るに
寫し易すい

ベ
ビ
ー
ミ
ノ
ル
タ



¥ 9.50

ゲスト判兼用
3 × 4cm判

速寫ケース ¥ 2.00

カタログ進呈

淺沼商會

東京市日本橋區室町
大阪市南區順慶町

全國寫眞機店
百貨店にて販賣

誌 ♣ 雜 ♣ 柳 ♣ 川

號壹拾第 卷三十第



聖書一冊菊一輪の二階也
路郎



川柳雜誌十一月號目次

表誌・路郎筆

文苑

川柳名句評釋……………麻生路郎…(四)

川柳指導講座……………塚越正光…(三)

武玉川一篇研究 (三〇)……………梅本秋の屋
森東魚…(二六)
蛭子省二

柳誌合評 燈火に語る……………高須啞三味…(二)
福田山雨樓

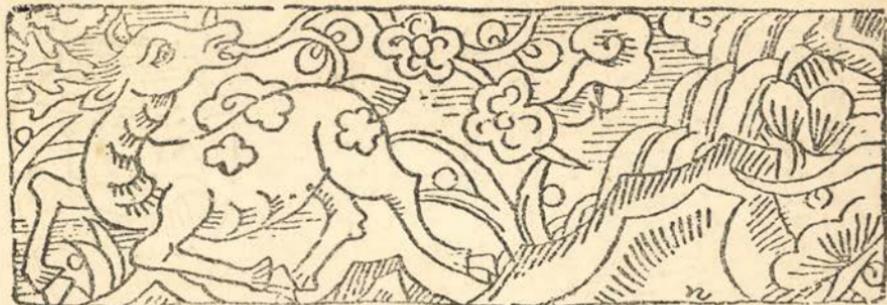
川柳趣味 展覽會の横顔……………(二六)

伽羅……………西田艸樂…(二六)

勸進帳餘談……………たかを・あきを…(三〇)

川柳書架…(六一)……………(三)

川・協・の・頁……………(二六)



第二川・協の頁……………(四)

川柳横町……………不死鳥……………(五)

創作

川柳塔……………麻生路郎選……………(四)

近作柳樽……………麻生路郎選……………(六)

日本名所名物川柳(京都の巻)……………山川紫明選……………(四)
朝賀大鱗畫……………(四)

一路集魚……………森東魚選……………(七)

各地柳壇……………(四)

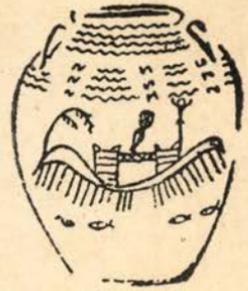
十年の歡び……………尼綠之助……………(三)

校正六號室……………(五)

柳界展望……………柳誌要目……………(五)

川・雜・案・内……………川柳家戶籍調……………綠雨……………(五)

川柳雜誌社關係の人々……………編輯縱橫……………路郎……………(五)



川柳名句評釋

(4)

麻生路郎

暇乞主人に襟を直される

太郎丸

主従關係を一概に封建時代の遺物と云ひ切れないではないか。この句の美しい情景を近代人は何んと見る。

水門はちつと耐へて冬の底

鬼佛

白い雲が水の底ですこしも動かない。冬の迫力を水門でしつかりと掴んだ作者の手腕を稱へたい。

目にもものを見せんとすれど金がいら

路生

あんな下劣な奴が幅を利かしてゐるかと思へば尠ならず癢に觸れる。家柄から云つても、學歴から云つても、比

べものにはならない筈だ。なのに、だのにとくやしがる度に擡頭するのがプロ意識。

腕力の順に子供は水を飲み

桑南

「次ぎは僕だよ」と釣瓶に口を持つてゆく腕白たち。こんなところにまで強者と弱者の對立はあるのだ。

借金は何ごも云はぬ年賀狀

半竹

この句から國木田獨歩の日記が思ひ出された。獨歩は年賀狀で五拾錢のことわりを書いてゐる。ホントに純情な獨歩であつた。しかし世間の人々はさうではない。この句のやうに……。

壁のしみライスカレーは十五錢

柳 一

ダミ聲が漏れて来る場末の食堂の情景を髣髴させてゐる
句外にジメ／＼とした街の憂鬱をさへ感ぜしめる。

雨へ耳立て、歸るの歸さぬの

蝶 五郎

あまり大降りにならぬうちに歸らねばと云ふころと、
歸へしともないので、この雨に歸へる氣なの、いゝえ妾歸
へしはしないわ、と云ふころとのそれだけである。それ
だけであるが、人物が躍如としてゐて捨て難い句だ。

幕間を舞妓は咲いた様に立ち

愛 日

芝居を観に来たのか、だらりの帯を見せに来たのか。三
太郎の句に「三人の舞妓三人燃えるやう」と云ふがある。

官邸の豪華公債赤字なり

紅太郎

威力と信用と安心を與へるための堂々たる建築物、それ
は保險會社や銀行ばかりではなくなつた。新聞社然り官邸
又然りか。

火鉢まで来る十能に風があり

三 葉

寒さがひしひしと迫つて来るではないか。透徹した頭、
静かな生活が思はれる。

石の門夫婦の歳が違ひすぎ

昭 二

虚榮と纏緖好みが取ツ組んだものか、それとも後添ひか
愛情の片鱗すらうかがえない冷たい夫婦を點描し盡くして
ゐる。

訪問着うちの疊に座らない

水 母

この句を一讀した女はクス／＼笑ひ出した。そして「ホ
ントですわ」と云つて訪問着と疊とを見比べてゐた。穿ち
得て妙と云ふ句である。

立人で立てる餘技あり名士なり

言 人

實業家の聲曲、貴族の手品等々々、時に何れが本職であ
るか疑はせるものがある。



麻生路郎選

秋の水顔を洗つてゐる自分	金澤	安川久流美	懐ろへ取りつくせない柿の夢	同
芋畠ふるさとへ来て陽に當り	同		青みかん去年の秋がまのあたり	同
悪い夢水に流れず齒をみがく	同		短冊の字は小切手の字に非ず	同
氣短かな機關車遠く蜻蛉とぶ	同		どこさんも同じ苦勞と兒を育て	兵衛
人の子の汚名鉛にぶちこまれ	同		有爲天變なぐさめ合うも白髪なり	長崎
晝の月汽車の窓から見失ひ	同		酔ふた妓を箱丁としては手もとれず	柳秀
傍目せず學校へ行く花芒	同		ラストまで踊つて欲しい人が出来	同



兒の言葉案外といふことに觸れ

働かぬ指を女給が賞めて呉れ

同

後妻にと禱の姿所望され

大阪 關本 雅幽

子澤山風邪ひいた子は叱つとき

同

強いて他に頼らず明日は明日稼ぎ

同

淋しさに岬の秋へ来て居たり

同

紙函を蓄めて女の子は育ち

同

晚酌もきめて娘に養はれ

同

談論風發ようかんをみんな食べ

大阪 須崎 豆秋

こぼろぎは足を落したのも知らず

同

無花果の立喰をして後場を待ち

同

衆生とはチリメンチャコの類なるか

同

師團長巡視セバート舌を出し

同

路郎先生御來松

朝空に雨は無帽の師を迎へ

長野 石曾根民郎

徳利ひとつ乾さば旅路は師にはるか

同

ねざめては湯の香の窓へ師をさそひ

路郎先生と別れる(一句)

同

師の汽車よひとしほ秋を縫ふてゆけ

同

冷遇の噂へ柱時計鳴る

同

剃刀を借りて女中にひやかされ

名古屋

吉田

水車

どうせもう破るやろけど花名刺

同

鳴けるだけ鳴いて鈴虫賣れてゐず

同

鮎美、卜居兩氏來る

大阪の噂へしきる蛸しぐれ

同

路郎先生と熱田へ詣す

一列に打つ拍手へ秋晴るゝ

同

ハイキング薬草の名を教へられ

大阪

橋本

縁雨

蠅たゝき硝子一枚破つた音

同

鮎焼に話のつきぬ旅の宿

同

縁日の店出し明日を考へる

同

縁先へ来てうす暗い空を見る

同

反感を抑へて謹聴し

大阪

阿部

閑生

路郎先生と淺間温泉一泊



- | | | | |
|------------------|-----------|------------------|-----------|
| よその灯に賣り切れてゐる屋臺鮓 | 同 | 火葬場の死んでも見たく出来上り | 同 |
| 疝癪の電話笑つて應へられ | 同 | リーダーとなるは馘首を覺悟にて | 和歌山 神田 晴二 |
| 病氣の子團扇の骨の数も知り | 同 | ローマンスたんとかくした灯が見も | 同 |
| 落し主質札の名とあつてゐる | 同 | 罐詰を切るは男の役のやう | 同 |
| よう騒ぐ子等だ不幸とも言へず | 鳥根縣 尼 綠之助 | 御本家の遅參會議はまとまらず | 同 |
| やつと寝た子供らよ虫が鳴いてるぞ | 同 | 納涼の人を集める傳導師 | 大阪府 朝田 新水 |
| よう喰つてゆくとは人のことならず | 同 | 早熟の娘としか見えぬ指輪なり | 同 |
| 久しぶり母の笑ひも黴の中 | 同 | 第三者ことがおきると手をたゝき | 同 |
| 押しの一手で男の道ゆく | 同 | 叱られてからの心は灯にうごき | 同 |
| 都市計畫三角形の庭になり | 今治 月原 宵明 | 朝風呂で天聲人語だけは讀み | 大阪 柳 大門 |
| 親の汗子の汗いつくしみ合ふ暮し | 同 | 引擔ぐ夜逃げの荷から箸が落ち | 同 |
| こぼろぎに秋の心を傾ける | 同 | 獨唱のレコード家を震はせる | 同 |
| みのる秋荷馬車へ蝗乗つてゆく | 同 | 赤蜻蛉ゴートのトップを切つて来る | 同 |
| 踏切で醫者の俵が待たされる | 同 | 軽いかけ引もサーピスの内 | 大阪 大西 八歩 |
| 店ひまになると時計がとまつてる | 高知 中澤 濁水 | 勤勉の手本を示す服を脱ぎ | 同 |
| 高下駄の洋服葱を買ひに来る | 同 | 叱る方の氣持にもなり叱られる | 同 |
| 茸狩を歸れば唇もう届き | 同 | 夜のとばり鐵の心になつてくれ | 同 |



死んだのは護國の神と云ふ仕組 長生 田島 破鼓

思ひ出の丘に夏草夏の月 同

引眉毛ツンとしてゐるナンバワン 同

橋の裏見上げ砂船汗をふき 同

塗替への白い看板雨つゞく 大阪 山田 菊人

看板に花屋は赤で花と書く 同

生意氣なポーズで犬は伸びをする 同

登山服ネオンの色へ元氣づき 同

お勝手の騒ぎは蝦のはねた事 大阪 麻生 茂乃

あの手この手この手の手で兒が育つ 同

水と油何を好んで和睦せむ 同

晝の風呂いつそあひるで居ましよか 同

便箋はあなたばかりの用になり 大阪 畑田よしえ

演説は稽古の過ぎた聲を出し 同

その呼吸師匠はやつとほめて呉れ 同

防空へ母も一役買つて出る 同

程ヶ谷は昔の宿場

遊廓の入口で床屋灯の青く 横濱 福田山雨樓

ある試験場で

ビンのあと無數に柱一ところ 同

茶碗の白さ秋の蚊逃げる 同

今辭めてしまへば此方の負けになり 松江 勝谷山川兒

万年床丹下左膳の額がある 同

梯子酒此處は裸で吞めるなり 同

ラシヤメンのまろとドアを抜けて出る 大阪 西 いわむ

此腕に自信があつて敵多し 同

山上は涼風此處はバンガロー 同

こちら向くとむつかしいきを云ふ男 神戸 喜多 春秋

甘えたい心を繼子遠慮する 同

朝靄へこぼして通る塵埃車 同

此邸養子養女へ子種なく 大阪 石田 沐天

あれも夢これも夢かと秋一人 同

その上に増税と來る國のため 同

履物を揃へ念押すことがある 京都 明石 柳次



エキホスへ新妻の手の汚れそう	同	秋風へ母は食慾減るばかり	同
順を待つ耳鼻科ネオンの見える窓	同	葉鶏頭妻の臨月近くなり	同
病室の日めぐりに見る我餘生	勝部 海棠	朝霧夜霧勤めは激務なり	同
束ね髪も後妾も未亡人	同	我影へ鼠の足の早いこと	同
運轉手右はあの世の一丁目	同	主人には濟まぬと思ふ今日の暇	同
看護婦の内證話は死ぬ話	神戶 西村 明珠	職業の厚司に遠慮要るもんか	同
はかなさはネクタイ派手になるば	同	名案をまとめるとこで子に泣かれ	同
肴焼く間子供を肩車	同	紙芝居前列だけが買はされる	同
眞裸子供は叱るまで逃げる	高橋 章泉	忠實に働んで帽子隅に掛け	同
月賦の金齒羊羹食はず居る	同	方言の一人金切り聲をあげ	同
後妻又横になるなり躰かき	同	友情がだんく痛いとこへふれ	同
そろ／＼と樽底を聞く臺所	大坂 松田 多郎	注射器へ父母の望のありつたけ	同
吾れも人の子元旦の日を浴びん	同	避暑に來てバスに詰め込まれる身分	同
元旦だ衣裳をつれて親が来る	同	雲ばかりうつして山の水たまり	同
文科でも農科でもよし御曹子	大坂 米本貴志子	冬の農家を平和となづけたる寫眞	同
演習へ肉井のおすしのと	同	解決は金でつけるといふ思想	同
火を附けて消して演習終りなり	同	蒼白い男が口をとがらせて	同

入選者偶然ですと嬉しさう

同

家政婦をして級長の子と暮し

尾崎

川村 観月

白痴なることの自覺も又哀れ

同

信仰の極致となりし山の上

同

松茸の匂を驛夫嗅ぐばかり

大坂

今井 菊路

穴ばかり堀つて日長の弟子大工

同

お互に水を打合ふ棟續き

同

黒鯛が釣れた味あり日が暮れる

尾崎

八竹 正柳

縋帯の下にも女薄化粧

同

用もない廣告くれるラッシュアワー

同

敵ながらダークホースに手を叩き

大坂

山本 葉光

三日天下それでも好いと思て見る

同

不具の子が母と来てゐる仕舞風呂

同

不機嫌に起されて仕事頼まれる

柳井

弘津骨人坊

妹の病氣氣になる外は雨

同

オリンピック何處もよき夜を更かし

同

赤とんぼ夕やけ小やけの子と遊び

今治

石手 河鹿

女房の氣は若いポートポートと

同

ほうぐ籠萬一と云ふ探し物

同

悪友をまいて歸つて兒に土産

東京

村野蒼梧樓

少し持つて借りられまいの受け答へ

同

是が非でも逆をみせまい床につき

同

税金に不平があつて晝の酒

名古屋

稻垣 正穰

甲種合格嬉しく酒も呑み習ひ

同

鳥すらし飼つて鳴聲聴くでなし

同

秋ふかく虫歯に泌みる酒を呑み

尾崎

酒井 斗風

打てば鳴る俺の心は秋の空

同

孔雀に似たる賣れつ妓の裾さばき

同

女もう食ふ物がなない夜の長さ

東京

杉山多慶期

心臓の強さたしかな銀狐

同

颱風の豫報へ母の氣がつかれ

同

いとしさのじんべの母は何か煮る

大坂

天野 ト居

妖婦のプロンズ葉鶏頭は眞赤

同

につと笑へばこゝろに風のゆきよ

同



葉鶏頭寝巻にふれた朝ほがら 日山 逸見 灯竿 鳥橋 松浦 一鴻

母親の涙をきけば俺のこと 同 心境の變化とは子が出来てからのこ 同

汽車の窓故郷の癡家見て通り 同 たてよこにうごく露天の映畫みる 今治 菊池 香方

團體旗指さす方に東山 東京 阿部佐保蘭 同 颯風に雀ばけつへ拾はれる 同

風へ苦心の菊を憶ひ出し 同 言ひ切つた心をくづす赤とんぼ 兵庫縣 林 朔風

銘刀の袋になつた妻の帯 今治 秋山 愨吉 同 逢はぬ日こそダリヤは赤し 同

入選をして看板屋貧乏し 同 一別來なつかしの友船を待つ 松山 芝田 靈子

御開祖も人間と云ふ末路なり 大阪 後藤 青兒 同 書置きへはじめて不孝知つたやう 同

効能のどれにも當る我が病 同 お習字を父が直せば不服がり 神戸 渡邊 木履

醫者と云ふ臭ひで醫者がすれ違ひ 大阪 北川 春集 同 いゝとこで次號に續く古雜誌 同

借つて來た鞆と知らず旅館貼り 同 割引のついた値札へまだ値切り 今治 石手向上庵

お人好しさて善人と言ひきれず 兵庫縣 水谷 鮎美 同 チツブ切りバスへも乗れず雨の中 同

お醫者様糖尿病のマダムとゐ 同 管制の夜は宵寝の住宅地 大阪 山川 一生

御飯粒こゝもくゝと兒に教へ 大阪 淺野 牧人 送九天、久米雄兩氏

頂上はまだかと黙り勝ちになり 同 宮島の空は秋晴勇みゆけ 同

モヒ注射する金魔窟灯を入れる 長野 中村 猪郎 同 申分あつて子供の敗けてゐず 兵庫縣 森山さわだ

出世でもするやうに妾すゝめられ 同 持てば使ふとて財布あづかられ 同



- | | | | | |
|------------------|----|-------|------------------|-----------|
| 向ふから見ればこつちもエゴイスト | 大阪 | 坂澄風 | 自動車のドアの響きも夜のしどま | 同 |
| 柔道の兄がつかむと痛いなり | 同 | | あらましのプランが立つて爪を剪る | 大阪 下農 清人 |
| 挨拶が上品すぎて乗り後れ | 神戸 | 大月 昭象 | 雰圍氣に威壓されまい眼をつむる | 同 |
| 父と同じ鉛筆が要りませてゐる | 同 | | 曼珠沙華昨日の蛇がひからびる | 今治 渡邊 曉童 |
| 雲ゆきを考へ下駄を履き替へる | 大阪 | 庄司淡路坊 | 提灯屋端然として墨をすり | 同 |
| ベタル踏む若さ雨中を走り抜け | 同 | | 働けるだけ働いて邪魔がられ | 大阪 正本 水客 |
| 赤札はどなたか嬉し美術展 | 大阪 | 大鶴 喜由 | 村中の除け者チブス背負つてき | 同 |
| 見廻せば一品足らぬ妻の膳 | 同 | | 愛妻の機嫌よい朝靴光る | 大阪府 春元 紀太 |
| 失職へ女入用よく目立ち | 今治 | 長野 文庫 | お座なりで通す停年迄の椅子 | 同 |
| ビシヤリツと不言實行頬へ来る | 同 | | 採用ときまれば通知すると言ふ | 金澤 荒木 立帆 |
| 女店員世帯じみたる奨めやう | 大阪 | 宮内 廣々 | 出ず嫌ひ妻と子供に勵まされ | 同 |
| 女店員噂を否定して辭める | 同 | | 別れ来て踏めばくづれる砂をふむ | 大阪 竹内櫻見女 |
| 先代の看板でまだ儲けてる | 山口 | 三原 狂路 | 日が経つて憐れた夢をなつかしむ | 同 |
| ねてる子へ頬すりをして叱られる | 同 | | どつちみち遣らねばならぬ女の子 | 奈良 嶋田 翠峯 |
| 雀もふくれ祖母も着膨れ | 大阪 | 鳴門觀潮樓 | 無いものは取れずに歸る高利貸 | 同 |
| 憎くからぬ男バラソル持たされて | 同 | | つかみそこねたチャンスを悔ひ日ぞ | 大阪 松枝 辯波 |
| 枕抱へて湯の宿の便り書く | 石川 | 高木鈴の家 | 秋冷へ妻慌てたりシンシン張り | 同 |



パスガール 黒木の御所に節をつけ 石川縣 勝山しとし

あんなのを買はうとすれば發車ベル 大阪府 同

草取りの一人田を出て添乳する 大阪府 大阪 正一

女尊男卑といふイヴニングドレス 愛媛縣 同

つきこぼす銚子恐縮して下り 愛媛縣 門田 雨城

抜き切れぬ白髪と知りし初老かな 大阪府 同

出る時の強氣どこやら歸つて來 大阪府 中井シナ子

好きの嫌ひのと女芋を食ひ 同 同

庭掃除すみれの花はおいでやり 廣島縣 小田五連發

火事見舞出してゆつくり記事を読み 同 同

祝酒 青年團の服で呑み 神戸 難波陽出男

言譯をする朝飯に芯が出來 同 同

年寄はその丸刈が氣に入つた 今治 武田 紫陽

壓迫は机を越えて來さうなり 同 同

薄幸な母によく似て妓を賣られ 神戸 山崎海中金

咬犬あり緊張をして戸を開き 同 同

改心をしたと丸刈笑はせる 大阪府 金井 串郎

幼稚園先生に二人ぶら下り 同 同

バナナ屋のたゞにはならぬ手を叩き 名古屋 星野 兄兒

結局は性分と見て手を控へ 大阪府 奥野 其奥

御亭主と振り代はりや良い噂なり 同 同

春ならと案内人は無念がり 今治 石手 尙好

氣持ちだけ名月らしいだんご喰ひ 大阪府 中川 連水

逢ひに行く金は古本屋でこさへ 松江 松崎 讓二

眞夏をば闘ひ抜いた人へ秋 大阪府 辻いの助

妻と來て割引のある映畫見る 神戸 山田 凡樂

灯ともせば萬年青一鉢ある机 尼崎 薦野 雨聲

月の暈戀はきのふの夢なりし 神戸 佐藤三迷子

この晴着ふだんと見せて里歸り 今治 花柳 英子

ノーチツプあとも向かずカフエーを出 長野縣 佐々木千隈

セバートが化けて出さうに病みほね 今治 富永 里子

親の傍から通ふ幸福を忘れかけ 兵庫縣 酒井美知夫

じつとしてゐても喰へるに再婚し 廣島縣 黒木七夜月

食ふて寝てそれでも豚の用が足り 大阪府 高磯 銀濤

腹立てゝ出る店なれど名残あり 今治 石手 直義

破簾恥なことにもなれて金を溜め 廣島縣 黒本 芳泉

秋雨に素氣ない君の氣を訊ね 神戸 山本 幸人

月給に拘泥はせぬ仕事振り 大阪府 糸谷 春草

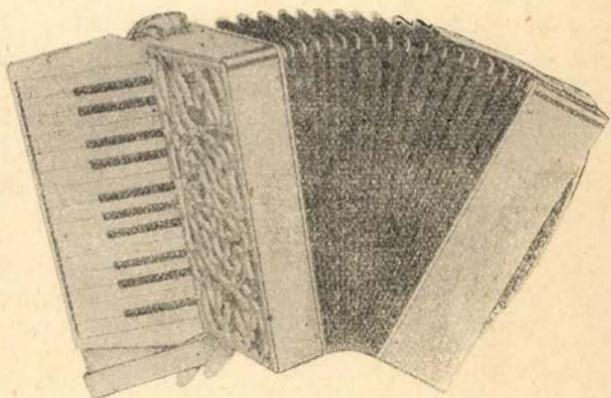
色封筒したゝるやうな文字で來る 熊本縣 寺田 宗正

夜に入りてますく騒ぐ轡虫 高松 楊柳夢
 醍醐味を話して釣へ誘はれる 石川 前田義風子
 止め手の無いラヂオが響き虫が鳴き 大阪 坂本遠見路
 小切手へ教養のある妻のペン 藤田 寛 獨歩
 憤つとして長女は次を讀みつゞけ 名古屋 水田 燕入
 洒落一つ言へぬ男が宣傳部 金 森田 白舎
 裸婦の繪に暫し胃袋忘れられ 兵庫 田邊 由布
 給料日豫算の珠もはねて見る 大阪府 黒川 紫香
 風鈴も月夜の虫の聲にゆれ 神戸 東 キヨシ
 其程度なら解つてた易の事 西谷 林 幹
 睫毛さへぬれた瞳はかくされず 尾崎 山田南濃路
 いかめしさ脱いで 巡查の浴衣で居 神戸 藤井 徒歩
 憎くらしい二人であるが良く似合ひ 今治 石崎 柳石
 打つ程に乾く道路の砂ぼこり 今治 鳥生 桔佛
 暗い道よつて二人の嬉しさう 神戸 櫛野 静水
 一汗を流して湯屋のラヂオ聞く 大阪 宮川 冠光
 暖簾をすつとよけ出た洗髪 神戸 坂上 啓坊
 川を行く川せみ秋の日を衝いて 今治 矢野蛇の鷹
 婚禮の招待夏の服がなし 青島 正木 翠舟

ヤマハ アコーデオン

- 10號... ¥10.00
- 20號... ¥17.00
- 30號... ¥23.00
- 40號... ¥28.00
- 50號... ¥40.00
- 60號... ¥60.00

カタログ送呈



60號 ピアノアコーデオン

山葉ピアノオルガン製造元

日本樂器會社大阪支店

大阪市・西區・四ツ橋南

電話新町一〇七三番





武玉川二篇研究 (三〇)

梅 本 秋 の 屋
 森 子 東 魚
 蛭 子 省 二

(714) 宇治にちらはふ殿の紋所

東魚「殿」とは誰をさしたのであらう。前句によつて成立つのかも知れないが、不明である。

省二「紋所」をつきとめ度い、氣になる。

秋の屋 和歌には宇治川を、藤の名所としてあるから、その藤の花の散るのを、「殿の紋所」に看立てたので、「殿」は殿原の意で、誰と確かに指定した譯ではなからう。

(715) 夜更て人を遣ふいんきん

省二 人は慇懃にして遣はねばならぬ。況して夜更けての事では。

秋の屋 他家へ客に行つた人歟。

東魚 泊り客とみた方が、味が深いやうである。

(716) そは切は投込ほとか馳走也

省二 蕎麥を投込むやうにして、おかはりを入れて、勧めるのが、もてなしである。島根縣にゐたお坊さんの話に、蕎麥の産地ゆえ、壇家にゆくと、必ず出る。さあ、もつとくと後から肩越しに、茶碗へ入れ添えられるには困り果てた。食べねば評判が悪くなる。「そばの客かむうち二つあけられる」

秋の屋 田舎へ行くと、蕎麥や饅頭を無理強されて、頗る困難する事があるが、先方ではそれを馳走と誤解してゐるのである。

東 魚 〓 私も田舎で困つた事がある。お替りを、すきを見て、本當に投込んで行くのだから堪らない。

(717) たゝらの中へ薬鍋なけ

省 二 〓 薬鍋と詠むだのは。

秋の屋 〓 梵鐘などを鑄造する時に、病人が長く使用した薬鍋を、踏籠の中に投入して、無病息災を祈る、と云ふのであらう。昔の薬鍋は多く唐金であつた。

東 魚 〓 秋翁のお説、御明解であらう。

省 二 〓 金杓子や鍋が、釣鐘となると云ふ句はあつた。

又實際に鍋や鐘を提供した事を記憶するが、薬鍋の話は初耳である。

(718) 相人か替女で恥をかゝせる

省 二 〓 相手にもよりけりだ。替女の眩織では。

秋の屋 〓 替女との情事が暴露して、みづから恥をかくの欺。眩織砲で恥をかゝされるの欺。その邊が少し曖昧である。

東 魚 〓 あつたら良い男も、相手が對手なので、きゝめがなく、ハネられたのであらう。

(719) 小野か曇てほとゝきす降

省 二 〓 『杜宇小野にともなへ立眩み』(堤亭)を探した

小野は……山城のか。

秋の屋 〓 小野は山城國の歌枕であるが、また「小」は、小田、小川などゝ同じく接頭語で、只の野をも斯く呼ぶのである。「時鳥降」とは、時鳥がふる程多く啼くといふ意だ。

東 魚 〓 私は高知で晝、盛に時鳥のなくのを聞いたが、立てつゝけに、追かつかけく鳴く、「降る」と云ふ感じは確にある。

(720) 下戸の鼻にはうまい木犀

省 二 〓 「香氣高く人をして酔はしむ」といふが、其酔ひ位では上戸向にあらず。甘き香氣あるが故に下戸の鼻に木犀だ。

秋の屋 〓 上戸よりも下戸の鼻を、多く刺戟するのである。

東 魚 〓 上戸には木犀の香なんかこたえない。

(721) 二代とは續め下戸の藏を買

省 二 〓 家運が續かぬ事か。下戸が二代續かぬといふのか。

秋の屋 〓 初代は下戸で金を溜めて、而して倉庫を買つたけれども、二代は上戸であるから、頓てそれを賣るのであらう、と想像するのだと思ふ。

東 魚 〓 藏を買つたつて、どうせ二度目につぶされるの

だと、握り屋を冷やかした心持であらう。

(722) めくらむすこの乳を長く吞

省 二 不憫であり、親も手ばなせず、長くのませる。

秋の屋 不具の子ほど可愛い、といふ俗諺の如くである。

東 魚 「長く吞む」に、哀れさがよく出てゐる。

(723) 仙臺へ齒の立ぬ稲虫

省 二 仙臺米は有名であり、多量に産出して各地へ送つた。それを「齒の立ぬ稲虫」と云つたのだ。

秋の屋 五十四郡の稻田であるから、大概の蝗害は、何でも無からう。

東 魚 仙臺の豊饒を大きく云ひ放つたので、少しく芝居氣が勝つてゐるやうに思ふ。

省 二 一話一言に「寛永九年ヨリ、奥州仙臺ノ米穀、始テ江戸へ廻ル。故ニ今江戸三分ノ二ハ、奥州米ノ由云々」とある。古句には「半分は江戸へこぼれる雀の餌」。『澤山な米で大きな雀なり』。『正(政)宗をわらぶ』にして江戸へ出し」と。現今の大阪の米三分の二は、朝鮮米であらう。

(724) 氣の強い女の落るあまの川

秋の屋 如何に強情の女でも、宵から銀河が天心にみゆ

る夜半まで、男に口説き立てられては、冠を堅に振らずばなるまい。

東 魚 七夕の夜に、口説いたのではないか。年に一度の星の逢瀬を云ひ立て、しんみり口説落したものと思ふ

省 二 天の川の説話に、關聯さすべきである。

秋の屋 再考。牽牛織女二星の傳説が、戀愛に始まつてゐるのだから、七夕の出来事としても差支は無。

(725) 飼ねつみ來るよし町の屋根

秋の屋 蔭間が飼ふ白鼠(一に大黒鼠)であらう。これは女子供が好んで飼ふものである。

東 魚 奇抜な句である。禿の飼つてゐるのは洒落本などよく見る處である。

省 二 幼時飼つた經驗がある。よく馴れるものだ。大黒天の使者なりとして、飼ふ家は富むといふ。芳町風景として面白し。

(726) むつくり起た醫者の横平

省 二 患者に起される。昔の醫者は横柄に構えるのも職業柄必要なものではあつた。

秋の屋 深更に可き起されては、職業なりと雖も言語がツイ横柄となる事もあらう。

東 魚 私の好きな句である。不平もあらうが、尊大に構へた職業柄の氣分が、ユーモアを感じさせる。

(727) 名代の狐、白い、食、喰ふ

省 二 有名なお稻荷様の狐。穴の前には白い飯が供へられてある。「白い飯くふ」と人間同様（上げたのか下げたのかは見方もあらうが）に、取扱つたところが、名代を冠した理由となる。

秋の屋 稻荷の狐ならば、赤い飯の方が適切である。

東 魚 白飯の處が、特に名代の狐なる所以なのであらう。

(728) 向ふの顔、さく、青刈

省 二 一丈餘にも延びたのを刈るので、向ふの顔がみえなくなつたり、塞いだりする。

秋の屋 謡曲に「蘆刈」といふのがある故か、稻刈よりも蘆刈の方が雅趣がある。

東 魚 「見えぬ」では、作者は満足出来ない。「ふさく」と云はなければ承知出来なかつたので、其處に面白味もあり、危さもある。

(729) 葉ほと世間をしらぬ茶の花

省 二 茶の葉は、どこの家庭にでも入込む必需品であるが、花の方は世間から惜しまれもせず、散つてしまふ丈だ。（茶の花を知らぬ川柳家もありはせぬか）。

秋の屋 此の句は理窟であつて、甚面白く無いと思ふ。

東 魚 理窟には違ひないが、前句によつて、其味ひが多少救はれる處があらうと思ふ。

(730) 夜はほのく、と通り者散る

省 二 朝歸り。（通り者は粹人の意でよきか。すると普通の柄で働きがにぶい）。

秋の屋 此の「通り者」は粹人でなくて、博徒のことを云ふのである。博徒を通り者と稱した例は尠からず有る。

東 魚 「ある時はこける程着る通り者」で、博徒説は動かぬところであらう。

(731) 染風呂敷の美しい供

省 二 奇麗な模様を染めた風呂敷を抱えた、美しい小娘が供をする。

秋の屋 美しい染風呂敷で、美しい供ではあるまい。

東 魚 風呂敷も供の女も美しいとみてよろしからう。

(732) かほちやまを抱て下るさし芽

秋の屋 茅屋根の葦替をする時、其處に蔓が伸びて、生つてゐた南瓜を腕取り、腕に抱へて下るのである。

東 魚 前説の通りであらう。主人自身が屋根繕ひをしたさまが、想はれる。

省 二 明解だ。私には少し判然としなかつた。「ほうふらの遺ふくぼむや藁の軒」の句を参考に手控にしてはゐ

た。

(733) 無念なりけり山伏の餅

省二 山伏の餅に犬に苦しむ。

秋の屋 山伏と餅を多く食ふ賭をして、遂にだまかされ
て負けた、といふ昔話が有つたやうだが、今それを想出さ
れぬ。

東魚 さいいふ話があれば、それに違ひない。狂言に
でもあるのか。私は祈禱の禮に酒でも出るとか豫期してゐ
たのに、餅とは氣の利かぬ田舎人だな、と云ふ心持ちかと
思つてゐた。

(734) 是切の布子着て買はつ鯉

省二 その布子も、遂には抜いでしまはねばならぬ、
初鯉の味がしやう。

秋の屋 借金を質に置いても、初鯉は買はねばならぬ。

東魚 値になる給は質に入れてしまつたので、素肌へ
古布子を、よんどころなく着てゐるのだらう。

(735) 晝を大事に遣ふ十月

省二 十月一日は後の更衣で、もう冬仕度だ。晝を大
事につかつて、大に役立てねばならぬ。日が短い。

秋の屋 十月の中の十日は、短日の絶頂であると、昔の
人は思つてゐた。

東魚 嫌味にとる人もあるかも知れないが、大事に遣
ふと云ふのを、軽い洒落た氣分に受取つて、よろしからう
と思ふ。

|| 篇完 ||

【追記】編の序に、「後に予か發句百句を加えて續編さし侍る
」とある如く、紀逸述の四季混雜がある。本稿のカットに現は
れて居る。

述 懐

鬼灯や人の口から 年か寄り

で終つて居るが、發句の研究は省略する。たゞ今後の解釋に際
しその百句中にて參考さし得るものは、努めて採用する。諒
せられたい。

輪講を了へて、淨書したのは、昭和十年七月二十四日、丑の日
である。

茲に、秋の屋、東魚の二先生に、深厚なる感謝の意を表する次
第である。(蛭子生)

三篇 古川柳研究の權威梅本秋の屋、森東魚、蛭子省
研究 二、三先生の不斷の御努力になる「武玉川二篇

研究」が本號で終結した。次號は二篇研究に關
する補遺、異説と云つたもので埋め、更に新年

特輯號からは「武玉川三篇研究」を續載すること
にした。御期待を乞ふ。(編輯局)

告 豫

川・柳・書・架 (六一)

川柳 善光寺 (第二輯)

信濃毎日新聞社編

▼本句集「はしがき」の一部に

一、作句の蒐集については第一輯同様
長野市丸山木毎、竹重雀亭兩氏の手
を煩らはした。昭和十一年四月上旬

▼昭和十一年四月一日發行、四六版假

綴九三頁。編輯兼發行人長野市妻科

一七三大日方利雄、發行所長野市南

縣町六五七信濃毎日新聞社出版部

▼信州川柳人の句を網羅してゐるとこ

ろに本句集の使命と價值がある。

川柳忌句集

(附 川柳家名鑑)

京都川柳聯盟編

川柳書架

▼本句集巻頭、山川紫明氏の「ともし
びはきへず」に

京都が全國に誇り得る唯一のものとして
ゐる川柳聯盟主催の川柳忌などの、
云々の文字がある。

▼黄子朗氏の一文の次ぎに

川柳忌當夜の句並びに出席者名を掲
げてある。

▼昭和十一年九月二十三日發行。菊牛

截四六頁、非賣品。編輯兼發行人山
川紫明。發行所京都六波羅京都川柳
聯盟事務所

朝鮮川柳

柳建寺土左衛門選

▼本書の「はしがき」の一部を抄録する

(前略) □本書にある人員は壹千名

以上と注せらる。□本書に選ばれ

たる句は九分迄朝鮮新聞記載のもの

のにて、残れる一分は朝鮮時報、

朝鮮民報、元山毎日新聞、雜誌に

於ては大陸工商、南大門、むつみ

酸漿、神仙爐及各地川柳會句稿

等にして未だ發表されざる創作も

多し。(以下略)

▼巻尾に朝鮮の語彙に關する「註解」

が掲げられてある。

▼大正十一年十月二十五日發行。定價

二圓。三五版三五二頁、註解三八頁

著作者正木準章、發行者關根利重、

發行所京府櫻井町二丁目一六〇番

地川柳柳建寺社

▼編者正木土左衛門君は今の正木柳建

寺君のことで、朝鮮柳界の元老であ

る。

澤田小兒科

醫學博士

澤田四郎作

大阪市西成區玉出町本通一丁目
電話 天下茶屋 二九一三番



川柳作家の目標

川柳指導講座「貯金」

塚越正光

昭和川柳百人一句初篇は全國柳壇の第一線に立つ作家……中には名だけの大家もあれば載らなければならない作家、地理的關係其他で二篇へ残された作家もあるが……百人が網羅されてそれぞれ、自信のある句を十句宛發表してゐるが、その一千句は私達の師表に足るものゝみ言つても過言ではない。この集句を見るに當つて「昭和川柳百人一句」初篇一千句の中には、矢野錦浪氏を除いては誰一人として貯金の句を發表してはゐない。それほど貯金は川柳と縁の遠いものなのであらうかさいふ不審を一應は抱いてみた、又一方貯金の句なぞ發表することを潔しとしないからかさも考へて見たが、金錢に關する句が相當見えるところを見るささうでもなき相である。そこで私は川柳作家は貯金に關心を持たないのか、貯金に對する觀察が吾作ら鋭くないのを氣付いてゐるかのごちらかであらうと勝手に推測することにした。

そこで百人の中の唯一人である矢野錦浪氏の貯金を見る

子の貯金少したまると親が下げ

貯金帳簿笥の奥の奥へ入れの二句があり、貯金といふ文字を詠み込んでないものには使つても溜めても金は面白し

がある。そのいづれもが通り句として知られてゐるし、「なる程ナ」と感心されてゐる。今更言ふのも可笑しい位だが、流石に通俗經濟の大家として「財の教」の主宰者として知られる谷孫六の別號を有つ矢野錦浪氏だけに、他の九十九人の作家の爲し得ないものを有つてゐたことがうなづける。(このところ私としてはちと揆つたい感じはするが、眞實だから筆を曲げる譯には行かない)

この他の九十九人が爲し得ない句境を早く掴むことが、川柳作家としての目標であらねばならない。課題吟にせよ雑詠にせよみんなそこへ行きつくまでの修業であり練磨である。世の中にはその自分のものをすら掴み得ぬにも拘はらず、いつぱし指導者顔をしてのさばつてゐるものが、ど

の位澤山あるか知れない。或は私もその中の一人かも知れないが……自分のものを掴む修業は一年で済む人もあれば三年五年或は十年もかゝる人もあるし、一生かゝつても掴めない人もある。まあせいゝ諸君は早く掴んで立派な作家になつて貰ひたいものである。

ではこれから諸君の貯金観を檢討することにしよう。

貯金箱昨夜の口紅落して

それは女給でもダンサーでもと言ひたいが、ダンサーならチケツトによる収入だから女給と断定してもよさ相である。まだちよつと言ひ足りない所もあるが、作家の言はんとしてゐるところはうなづける。そこで、

貯金箱昨夜のルーヂユ落して

と句調を整へるだけにして置かう。(句主 尼ヶ崎清輔君)

病人に貯金帳じつと眺められ

じつと眺められを要約すると凝視られになる。或る場合にはじつと眺められでなければならぬこともあるが、茲ではみつめられで充分意が通じると思ふ。だとすれば、

病人に貯金の残を凝視られ

でも済むが、もう一飛躍させて、

病人に貯金の残が氣にかかり

としたらその焦慮は適切になる。(句主 大阪市葉光君)

貯金する力が出来て恩を知り

力には相違ないが、それではごつい感じがするし、恩を知

りもとつてつけたやうでいけない。そこで、

貯金する餘裕も出来た恩返し

なら恩人への感謝の念も表現出来るのではなからうか。

(句主 大阪市 眞壽夫君)

よい旦那にされて貯金はからつて

川柳が悪口を言つてはいけないとは言はないが、悪口の中にも同情をもつとか、愛を示すとかは、私達の是非心がけたいところである。幸ひこの句には作家の同情がうかがへるが、その同情的な観方がよい表現ではない。

だんたんに貯金を減らすよい旦那

上句調を整へては見たがよい句にはならない。

(句主 大阪府 勝君)

在營の貯金が母に涙させ

涙するといふ言葉があるのだから涙させといふ表現も許されるが、茲は平凡に

在營の貯金に母を又泣かせ

ぐらゐのところでは我慢した方がよさそうである。

(句主 朝鮮 峨山君)

いつとても貯金を當にして終ひ

こんな場合に使ふ言葉としては

いつとなく貯金を當にしてしまひ

の方がよさそうである。(句主 和歌山縣 晴二君)

面白く貯金出来てる主婦の友

他の婦人雑誌でもよさ相だが、主婦之友のすべてがこんな感じを感じさせるので、びつたりとしてゐる。

面白く貯金が出来る 主婦の友

と句調を整へるだけにだが、「面白く出世が出来る太閤記」といふ古川柳があるだけに何うも私としては困つてゐる。

(句主 大阪市 佳風)

貯金などしても死ぬんだいい氣機

貯金をしないものゝ貯金だが、なまじいゝ機嫌などと言はずに、

貯金帳死ぬのを延ばしてはくれず

視角を變へて見たら面白くなる。(句主 大阪市 高調子君)

また一人生れて貯金くずれかけ

藁の上にも三百といふ子が生れて崩れかける位で濟めば結構だが、恐らくは駄目になるのではなからうか、そこでさうして果敢ない貯金といふところへピントを合はせて、

又一人生まれるまでの貯金帳

としたら、積んで崩すそれが表はれると思ふがどんなものかしら。

(句主 大阪市 一騎君)

貯金する賞與を妻に念押され

念押されは窮窟である。そこでこの一歩手前へ戻して、

實行はともかく賞與貯金案

といふやうにサラリーマンの年末風景を捉へることにしたら、その窮窟からは逃れられる。これも一方法である。

(句主 尼ヶ崎市 南濃路君)
金やれば貯金する子の頼もしく

本欄の作家に技巧を求めることは求める方が無理かも知れないが、これではあまりに曲がないといはなければならぬ。そこで視角を變へて、

頼もしく貰つただけを貯金する

と見直してみることも一法である。

(句主 兵庫縣 美知夫君)
中年から貯金の出来る相といふ

金の溜まる相と貯金の出来る相とは大變な相違がある。貯金の出来る相などはなさ相だが、さういふ言ひ方もあるかしら？

金運は中年にある貯金帳

と術語を使つて見たが、句主はうなづけるかしら。

(句主 大阪市 水坊君)

當座預金實は借りるを目的に

當座預金は貯金ではない。特別當座なら稍貯金の部へ入るかも知れないが……況して借りるを目的にしたつて對人信用より對物信用を主とする銀行は擔保がなければ貸しつこない……これは財の教になつたかな……のだから出直すより仕方がない。

(句主 鳥根縣 章泉君)

病身へ貯金強く眼に映り

これはきつと慌てたので字を抜かしたのだらうと同情して

病身へ貯金氣強く眼に映り

と一字挿入して置くだけにする。(句主 大阪府 柳藏君)

子の育み貯金と共にたのしんで

育へま行の送りなはぐくと讀むことになる。子のはぐくみでは意味をなさない。

子の育ち貯金と共に楽しんで

と親心のそれを詠つたことにして置かう。

(句主 朝鮮 骨人君)

其當時五錢二厘て貯金もし

この集句を最初に見た時この句へ疑問符を打つた私は、いろ／＼調べて見たが五錢二厘が判明しない。これは斯道の大家谷孫六を煩はさねばならないと思つてゐたが、つい訊ね損ねてゐる内、これをまとめる時が來た。生憎今は浦和に住むので急場の間に合はない。こちらでも調べて置かう、句主も説明して呉れれば幸甚である。

(句主 大阪市 社太君)

こんな時句主が住所姓名を明記して置いて呉れると問合せることも出来るのに何うも困つた。

預金額惣と一所に殖へてゆき

頑に言へば貯金と預金は違ふがこの預金は貯金のそれと見ること出来る。第一貯金額では言葉にならない。そこ

でこれを承認して見るとあとは文字だけになる。

預金額惣と一所に増えてゆき

だがこれでも預金額が生硬な感じを與へていけない。

(句主 今治市 文庫君)

以下は添削を要さぬ句だが、今月は先月と比較すると倍の八句もある。この調子で毎月加筆を要さぬ句が増えて行つたら貯金帳の残高を見るのと同様な楽しみになるだらうと思ふ。諸君私を嬉ばせて呉れる可く大いに努力して呉れ給へ。

借金と別に貯金を持つて居る

通帳が千鳥になつて溜らない

家政婦の貯金喰込む月もあり

金貯めていつしか捨てる依頼心

拾圓になつた貯金を褒める父

新家庭天引貯金すると決め

お産して即時拂のつゞく事

出來た子の名前でかけてある貯金

病む母を涙ぐませた貯金帳

さて例に依つて最後に私の句だが、最近友達の獨立を祝して作つたのをお目にかけて責をふさぐことにする。

獨立をする日が近い貯金帳

頁の協川

柳人に告ぐ

日、日東より出づ——この調子で川協の仕事は伸展してゐる。

川・協を批判するならば、机上論でなく、實際問題としての方法的批判でありたい。そして、よりよき指導的批判であつて欲しい。徒らな揶揄や的外づれの批判は筆者自身の無知の表白でしかない。川協の仕事は柳界の將來を三思し、たとへそれが牛歩的であつても誤謬なき堅實さを以て進みたいと思つてゐる。

川・協の仕事をして見て川柳人の心のおきどころといふものが一層ハツキリして来た。趣旨には賛成だが仕事は邪魔してやらうといふ心がけの柳人さへあることを知つた。心の貧しい人々があるから宗教が光るやうに、そんな心がけの柳人がゐるからこそ川・協の仕事

事に意義があるのだ。従つて仕事の上に張合も出る。

一段の努力を誓ふ。(路)

川・協の範圍

「美す」の巻頭言に關西の川柳人協會、關東の京濱吟社聯盟の文字があるなるほど京濱吟社聯盟は關東のものかも知れぬが、川柳人協會は關西の川柳人協會ではない。海外の川柳人まで加入してゐる點から云つても川柳人の川柳人協會である。強ひて所を冠むせたいなら世界の川柳人協會なのである。この點、「美す」に限らず、誤解してゐる人々が尠くないやうである。從來なんでもかでも地方的に解釋せうとする認識不足がこの原因を作つたのかも知れない。幾度も繰返へすやうであるが川柳人協會は對吟社の觀念をすてた柳人個々の横のつながりの運動なのである。

川柳人協會々則

第一章 總則

- 第一條 本會ハ川柳人協會ト稱ス
- 第二條 本會ハ事務所ヲ大阪市ニ置ク
- 第三條 本會ハ川柳ノ社會化並ニ向上ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スルタメ左ノ事業ヲ行フ
 - 一、會員相互ノ研究並ニ親睦ヲ圖ルタメノ會合
 - 二、其他必要ナル事業
- 第五條 本會ノ會員ハ之ヲ名譽會員及正會員ノ二種トス
- 第六條 正會員ハ會費トシテ一ケ年三圓又ハ半ケ年一圓六十錢ヲ前納スルモノトス會費前納ト共ニ正會員章ヲ發行ス
- 第七條 既納會費有効期間ヲ經過シタル後、次期ノ會費ヲ納付セザルトキハ其ノ資格ヲ喪失スルモノトス
- 第八條 名譽會員ハ理事長之ヲ推薦ス
- 第九條 會員ハ毎月柳誌一

川柳雜誌」ノ配布ヲ受ケル外左ノ特典ヲ享有スル事ヲ得

一、柳書柳誌ノ取次並ニ割引

二、本會及川柳雜誌社主催ノ會其他諸會合費ノ割引

三、特種會合ノ會費免除

四、川柳誌上相談

五、一路集應募資格

第三章 役員

第十條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

理事長一名 常任理事二名 理事若干名 評議員若干名

第十一條 理事長ハ川柳雜誌社々主之レニ任ジ其他役員ハ理事長之ヲ推薦ス

第十二條 理事長ハ補佐ス

第十三條 評議員ハ本會ノ重要會議ニ參與ス

附則 本會則ハ評議員會ノ決議ニヨリ變更スルコトヲ得

大阪市西成區玉出 本通三丁目三六

川柳人協會
電話天下茶屋二五七九
振替大阪三一五一四

二編

宮尾しげを畫並編

昭和川柳百人一句

豫約

募集

先に第一編を出しまして好評を得ました事は、編者が川柳界への文献としての企圖に對し多くの柳人の御後援の賜物と感謝いたしております。この度の第二編は初編に収録できませんでした方々に、新人の方を加へての百人でございます。この本による自選句、柳歴は如何に調法便利であつたかは、初篇を御覽になられた方ならば御判りになる事でありませぬ。初編は好評の割りにおもわく違ひで五百部刷つたのが三百やつと云ふ仕末なので、損を見越しての非營利的のこの出版に又してもの缺損はしたくないので、この度は豫約された部数だけしか印刷しないで缺損負擔を軽くしたいと思ひます。勿論初編同様再版は致しません故、後になつてから御希望があつてもこの編の御手入はむづかしい事になります。私のこの出版は其場限りのものでなく十年二十年いな百年の後になつて初めてその眞價を認めて貰えると思つております、もし現在の柳人が認めてくれなくとも、万句合せや柳樽が出版當時さほどにも思はれなくとも、今になつて貴重書として扱はれると同じ氣持の出版なので、柳人に對しての無理強いはいたしません。理解ある柳人だけの御申込をお待ち致します。十二月五日で締切ります。

保存版 純日本紙 二度刷 一部 金貳圓 外に東京市内送料六錢 地方送料十錢

普及版 日本紙 一度刷 一部 金一圓 同

初編の價格も同じであります。御入用の方は共に御申込下さい、圖書館等に寄贈してしまつたので残部が僅少になっておりますから。御送金は振替口座東京四六五一一番宮尾しげを御利用なさるが一番便利であります。本編は御送金を以つて御豫約と致します。尚つゞいて三編は來春出版の豫定であります。

申込所

東京市豊島區巢鴨六丁目一千二百九十番地
振替東京四六五一一番、電話大塚六六一七

宮尾しげを



伽 羅

西 田 艸 樂

無駄足に召したは伽羅の御下駄也

奥州は五十四郡の太守たる、伊達綱

宗ともあらう人が、奸佞なる一族伊達兵部、家臣原田甲斐等の術策に陥つて

吉原通ひ。その三浦屋の高雄づれにふられ通して、ついには三叉の吊し斬と

いふ修羅場に及び、前掲の句外數十句に詠まるゝ處であるが、さて伽羅の御

下駄とは、さすがに豪華なものであるが、先年之大阪植物園長の宮南裕氏が

拙宅に來られて、植物に關する古句の集めたものを見られ、前掲の句に就い

て、あれは「伽羅木」の下駄であつたといふ事だと仰言せられた。

「いゝへ、古川柳では伽羅木では通りません」と私が言はなければならぬ程

古川柳の伽羅木でない事が判然であるキヤラボクといふ木は、よく庭園な

どに植へる一位科の植物で、イチキに比して葉が密である。イチキ、カヤ、

イヌガヤなど此の科の樹木の中で葉の一ばん小さいものである。此の木材で

下駄を作つて履けない事はないが、特に伽羅の佳香を有つ譯でなく、まして

それ位なもので仙臺様の御下駄と騒ぐがとこはないのである。

伽羅といふものは、それとは違つて第一日本に産せず、印度地方に生ずる喬木瑞香科に屬する。そして、その木を伐り倒して雨露の中に放置するとか土中に埋めて置くとかして腐らし、樹脂分の多い心木ばかりになると、それが沈香シキヤウとて、結構な薰香料となる譯であり、その黒色なるを以て伽羅（梵語で黒の義）と名づける次第である。

「伽羅千代萩」では「めいぼくせんだいはぎ」と讀ませてある位名木に違ひない。香合の方式などは空つきし知らないから、詳しい事は言へないが、此の沈香（伽羅）を焚く時は特に六ヶ敷の心得が要るそうで、まづ減多に下賤の鼻ではきけない代物なのである。

お釋迦様と同木りの下駄が出来

印度の佛工、毘首羯摩ヒシュカモの作つた釋迦の尊佛といへば佛像では此上なき尊いものであるのに、それと同じ木を下駄



町・横・柳・川

うすら寒い晩秋の夜、編輯室へさ急ぐ途中

「い、お月さんが出てるますわ」さ致えられた路那

ああほんにほんにさあほぐ

後の月

と、すぐ句にしてみました。

☆

眞田幸捐君、あれでなか／＼の變り者、汽車が好きでくたまらず、汽車に乗って日本一周を思ひ立ち海岸線ばかり走って

に作らせて、吉原通ひとあるところに五十
四郡の太守、吉原での豪華版、紀文大盡、
榊原式部大輔、尾張大納言など肩が並べら
れるといふものである。

そこで事實そんな御下駄を召されたのか
どうかといふ事になると、芝居の「千代萩」
から出た巷間の噂、バツと擴つて尾に鰭が
ついて、どこまでが事實で、どこまでが噂
か、詮議だては野暮の天井であらうが、大
百科辭典にかういふ事が書いてある。「轉
じて高貴なるものゝ意に用ひられ、好男子
、よき下駄を伽羅下駄と稱し、廓言葉に金
銀を伽羅と呼ぶに至つた」云々。

すると伽羅香若衆といつても、必ずしも
伽羅の油をつけた前髪の男でなくても好男
子の代名詞にもとれ、上等の下駄を召され
た仙臺様だから伽羅とするのに、本當の伽
羅でなくてもよい譯ではなからうか。もし
それ廓言葉で金銀を伽羅といふのなら、小
判と高橋太夫を兩天秤にかけた殿様は正し
く伽羅殿であつていゝ譯である。

話は序だが、その結構な下駄が豆腐屋の

薪に焚かれかけたといふ一條は、膽を冷す
ではないか。

いくら松の位の太夫だとして、高が遊女風
情の高雄にふられ通しては、殿様の名が立
たんといふ次第で種々様々に御盡しあるが
何を隠さう高雄には二世を契つた島田重三
郎がある限りは、「いやでありんす」の一て
んばり、そこで島田もぢつとはして居れず
高雄を身受するには金がなし、思案の果、
浮世渡平なる溢れ者に頼んで、仙臺様と出
合喧嘩を仕掛けたが、かへつて渡平は殺さ
れ、殿様は京橋邊豆腐屋へ立寄つて息繼ぎ
の水を求め、その返禮に伽羅の下駄を與へ
た處、香木とは知らぬ豆腐屋は竈の中へ投
げ込んだといふのである。

鼻をびくびく豆腐屋の兩隣

民の竈を匂はせる御放埒

こんな句が十數句もある所謂、こりや、
どうしても仙臺様の下駄はキホラボク（一
位科）では通らないのである。

「陀羅尼集經」には伽羅樹の枝を以てある
呪にする事が記載されてあるそうで、それ

東北から九州の果てまで廻つて来た。日敷にして八日間、賃金四十幾圓也、食事は汽車辨ばかり、車窓から首を出しての見物で途中下車を一回もしない。勿論宿屋の関は跨げない。

新潟は夜中何だ何んだか判らなかつたさうだ。鐵道省が表してバス位贈つてもいい汽車ファンである。

☆

寺でない寺が柳樟寺に、柳建寺、坊主でない坊さんが角懸坊に溪花坊。村でない村が五花村に日本村、山でない山が壽山に二山。

☆

又しても病牀六尺にある蛭子省二君から葎乃女史宛書信の中に「病上手、死下手」の文字を見る。論じてはカンカンガクガク路郎も暗涙をのむで平癒の駄漣をしてゐた。



勸進帳餘談

たかを・あきを

でなくとも高價な香水として佛像を刻み、薰煙の料となし、白檀、紫檀をはるかにしの逸品である。學者の説によると伽羅と

沈香とは同一植物でないともあるが、先づ一般に同物としてよいと思ふ。

ごうさんばり浪花座に前進座創立五周年大阪興行十回記念の「勸進帳」を観た。長十郎の辨慶が上手の、翫右衛門の富樫がごうの、國太郎の義經がごうのさいふのではない、この一座と私は他のごこの一座よりも馴染みが深い、まだ猿之助さのもつれから松竹の司配下の道頓堀へ進出できなかつた時代、この薄幸の一座を無理から上げたのが朝日會館で、先輩同僚の高松正道君から最初私に誘ひ込まれたのがそもその因縁である。浪花座の花道、さつさ常式幕が引かれて、辨慶が例の飛び六法で揚幕へ入る引最客はみなボツとする、可なり好くやつてくれたとさるさまたも一度幕が開く、一座が勸進帳の扮装のまゝずらり立ち列んでのアイサツだ、

朝日會館はむさくろしい衣裳や黒い襟のかまつた浴衣着のまんまの舞臺口上だつたのが今日は隆さした見違ふばかりの立派さ、辨慶の苦衷の藝よりもこの方に奪る涙がこぼれるのであつた。老父が伴の出世を嬉しがるやうな氣持ちで。

それに就ても思出されるのは二十五年ほど前私もお伽劇の中幕史劇として勸進帳によく似た行き方の村上義光といふのを演じ今寶探歌劇の大元老である久松一撃がその義光で私が大塔の宮、いづれも山伏姿で新關を通らうとする、關守の庄司が錦の御旗さへ措いてゆけば許すさいふので宮を初め四天王は先づ無事であつた。遅れてあさから追つてきた義光がこれを見てかつ

☆

喜多春秋君が基會所をしてゐた頃の話だが、席料を置かずに歸るへ人があつても氣の弱い春秋君は催促をようしない。そこで席料拾銭と大きく書いて貼つて見たがキレメがない。そこで又一枚大きく書いて貼る。三枚まで貼つても一向見向きもして呉れないので、さうく棒を折つたんださうな。笑ひ事ではない。

☆

神戸を中心に兵庫縣では一の字のつく雅號の持主が多い。これは地方意識の反影かも知れない。古くは一山、現在の人では一狂、一服、一鳥、一峰、一才一潮等々々。

☆

入札かと思つたら句會だつたお寺詣りさば若いのに殊勝な心がけだと思つたら矢張り句會だ

☆

と怒り、庄司や番卒とも劇しい立ち廻はりののち、さびは旗を奪ひ獨り幕外で例の飛び六法で引込むさいふ筋であつた。

この私たちの一座は兒童劇の新興運動として各地方を巡行したが、ある教會の劇場でこれを演じた。觀客の多くは子供たちや女學生ばかりで歌舞伎なんか見たことがない。初めの處は好かつたが幕外の六法になると一大滑稽に思はれてしまふ。ここにその時金剛杖ならぬ御旗の棒が墨で塗りたてさきてある。堀つたのをやアさ左に持ち代へて右の手を擴げ大きく見物席の方に開くさ掌もまつ黒々、ゴツと笑はれたが御本人は知らず夢中で好い氣になつてやつてゐた。いや今から思ふと冷寒、これでもいくらか地方の歌舞伎教育にはなつたらふも自ら慰めてゐる。それにしても河原崎長十郎の辨慶はまづ／＼危けもなく、朝日會館の十周年記念にもこの勳進帳を出すさいふから嬉しい、たゞ長い花道ができぬだけが氣の毒なやうである。

ついでこの間、泉北郡のハイキンケに行つた途中桑原村(雷の落ちた傳説の村)のあるお寺にある辨慶が勳進帳を聲高々讀み上げる文句の中に出てくる俊乗坊重源之墓さいふがあつた。

餘りまだ誰れも知らない、詳しくは考へて改めて報告することとしよう。

年賀はがき印刷

畫仙紙 白フチ百枚 一圓

二番唐紙 白フチ百枚 一圓

臺紙御好みに應ず

年賀はがきの印刷は和正堂にたのめば氣の利いたものが出來ます。柳人のコッをよくのみこんでゐますから——

路 耶 生

色紙・短冊・書畫
表裝・風流・文具

大阪市南區心齋橋筋二丁目

大丸一丁南之辻東入

和正堂

電話南(六)二七一五番
播替 大阪九一七五番

つた。

編輯子が二階からズシン／＼と降りて来た時、不思議なことに手もかけないのに襖がスーッと開いた。

アト御曹子が襖の裏に蜘蛛のやうにヒタリとくっついてゐて

「この頃流行る機械扉や」
と云ひながら澄ましたもの……
蛙の子は蛙、ユーモリストの子はユーモリスト。

☆

廣告のこゝで社主と機見女が田圃の中にある某會社へ出向ひた途中普通の蟬よりも四五倍もある巨大な蟬を見つけた。

押へれば芒放せばきり／＼の句を口ずさみながら、二人は廣告のこゝなんか完全に忘れて蟬を捕えるのに夢中になつてゐたさうな。

川柳詩人たちに榮光あれか。

☆

十 年 の 歡 び

笹川支部 尼 綠 之 助



川柳雜誌社笹川支部
創立十周年記念川柳大會

十月十七日 今市町

於片岡旅館

清秋十七日、午後二時大會の幕を開く、本社麻生路郎先生、生田翠夢氏臨席、伯耆支部幹事三嶋美笑、松江支部幹事勝谷山川兒の諸氏外三十餘名出席、支部幹事尼綠之助主催者を代表し創立十周年の感激を語り、開會の挨拶をなし直ちに別項募集記念川柳を發表、席題に移り、後路郎先生の講演 前田五健氏外諸氏の祝辭、祝電の披露、記念連寫生田翠夢氏の祝辭等あり、薄暮散會、後會場を移して祝賀意義ある大會を全く終了萬才

三唱で開散した
主 席 者

路郎、翠夢、雷相、田嶋緒、好郎、雷門、高義、綠之助、松濤、大朗、朴泉、一湖、章泉

寫眞説明―(前例右より)一湖・美笑・綠之助
海棠(中例右より) 笑朗・ふじ子・壽木女
凡愚・茂都子・雷門・翠夢・田嶋緒・路郎・
雷相(後列右より) 月兔・雨舟・章泉・慶吉
華村・好郎・高義・朴泉・羅門・松濤・大朗
京斗・草路・笑鬼・山川兒・さわだ

公立社の藤堂社主、伊賀の上野から毎日出勤、昔なら足の早い人でも三日や四日はかかるさ。それを本を讀みながら僅に一時間で大阪へ出るのである。時代は移るの感が深い。

☆

従三位勳二等がゾウロイで刑務所に收容された。編輯子の頭の中には

役人の子はにぎく／＼をよく覺え

といふ古句が浮んだ。息子さんがあるかどうかわからないが、この句を脊々服膺すべきである。

☆

家が廣いので、お掃除に生れて来たやうだと貴志子さんのなげき。川柳家の轉居々々に、「ちつさも落ちつきやばれへんのネ、なんきやな」住所録へ首を突ッ込んでのなげきは機見女史。(不死鳥)

凡愚、慶吉、獨仙、美笑、華村、山川兒、雨舟、笑鬼、草路、月兔、壽木女、茂都子、ふじ子、京斗、羅門、さわだ、海棠

記念募集句「動」 麻生路郎先生選

額	のまゝ	動く	自分が	惨めなり	海棠
じつ	として	居れぬ	生れを	嘖はれる	芳泉
泊る	氣のもう	動けない	酔ひを出し	二瓢	
記念碑	にさもなき	秋の陽が	動き	亮	
病んだ	子に玩具	動かす	並べられ	みちる	
ちんちろり	心センチ	に動く	秋	松濤	
臨終へ	父と母との	目が動き	笑期		
女給早	や心の動き	看て執れり	破懸兒		
をしごり	の情痴の波	が動く	朝	田鶴緒	
不動尊	叶はぬ願ひ	いつも	きき	早苗	
海の如く	感激に動き	歩くなり	羅門		
パリカン	へ動く	頭に嫁も	呼び	慶吉	
結局は	パンへパン	へと動く	の	華村	
家計簿	へ動かぬ	妻の目に	涙	八雲	
朝の星	都會は	動き初めたり	正雄		
病める	子の額へ	母の手が	動き	凡愚	
母親へ	月代の子	のよく動き	可香		

五 客

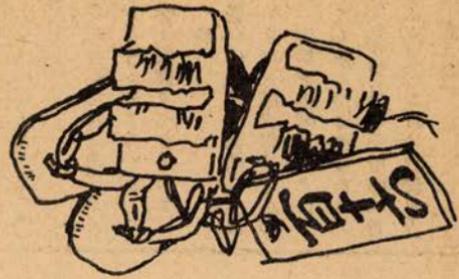
山鳥も動いたゞけで死を早め 虎雄
 目の玉が動き 新兵叱られる 正治
 世の動き日輪様は今日も上 雨舟
 カラカラと笑へど野望動いてゐ 緑之助
 人の夢最後となりて口動く 眞太郎
 (人)片慥何思ひけん川を剪り 好耶
 (地)満月へ動いてゐるは芒のみ 樹大佐
 (天)世の動き父はさみしく娘を赦し 不川

席題 「十年」

尼 綠之助選

十年の浮沈忍んだ豪華版 獨仙
 十年といふ日の金を握りしめ 美笑
 こち／＼と貯めて十年振り返り 高義
 十年一とむかし老母の言葉はつきやなり 海棠
 若き日の十年後を信じ切り 笑朗
 十年を同じ社宅で住み馴れる 大朗
 十年の深いうらみに目が据り さわだ
 この土地に慣れて十年夜となり 凡愚
 (人)十年振り女に笑靨あるばかり 京斗
 (地)十年目子が嫁が孫が歸る日の 水煙
 (天)十年の苦節母として生きる 羅門

(本稿以外の大會句報は次號各地欄に掲載)



日本名所
柳川物名

京都の巻

山川紫明選
朝賀大鱗畫

(四) 新京極

京極で逢ふ悪友へ母を連れ

京極を旅の浴衣で二度通り

奉公人根性京極を食ひ歩き

五色豆新京極の色で買ひ

狸公三

水客

木履

陽幸

悪友と来て京極の灯が眩い

信心は京極を斜に扱け

櫻湯の畫を泳いで見たくなり

久し振り矢張り新京極のよさ

◎

京極は宵長二郎に似た顔に逢ひ

世間音

同

佐保蘭

同

辻いの助

(五) 知恩院

知恩院を踏む靴下の破れてゐ	木履
知恩院へマイクの据る大晦日	世間音
故郷の母鷺張りへ疲り切り	狸公三
知恩院鷺張りを踏みなほし	石燈籠
知恩院踏みしめて板覗かれる	有耕
知恩院小砂利は京の雨を吸ひ	水客
圓山の騒ぎをよそに知恩院	静城
知恩院さゝらの傘に教へられ	佐保蘭
知恩院ガイドを連れた人もゐる	陽出男
甚五郎の傘仰いでる團體旗	いの助
國寶の廊下うか／＼通りすぎ	澄風
知恩院で仰向くところを教へられ	木履

◎

名所名本日

京都の巻 遷者 山川 紫明氏

(九) 芋ぼう 締切 十二月五日

(十) 先斗町 締切 一月五日

投句は本社宛 用紙ハガキに限る

名物川柳を募る

新京極は東京の浅草大阪の千日前である。一日の享樂はこ
 こにあつまる。お上りさんが、東西本願寺詣でを型の如くす
 まして落付く先は矢張りここである。
 知恩院は五右衛門が置き忘れた唐傘で有名、鷺張りの廊下
 で知られたところである遙に小手をかざしてゐるのは即ちそ
 の唐傘を仰ぎ見てゐるのである。



川柳 展覧會の横顔

松本市大名町に洋館三層樓の鶴林堂といふ書店がある。十月二十日、二十一日の兩日にこの三階で川柳趣味展覧會が開催された。

この街にまつては全く異敷の催物であるので入口の立看板やウ井ノドのポストター、さては窓下のランタンなどが衆人の眼をみはらせた。

階上には川柳雜誌社の紫地に白く社名を染め抜いた三角型小旗が懸つてゐる。アサヒグラフ所載の「川柳のヒント」「京阪カメラ川柳」が掲出され、「佛都の夜カメラ川柳」(信濃毎日所載)、誌上川柳寫眞展(川柳きやり所載)

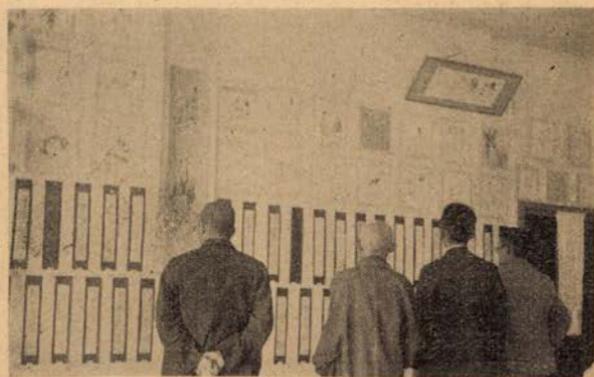
しなの同人習作短冊並びに書贊などが川柳趣味の匂ひを漂はせる。會場内にはオール日本の柳人の半折、横額、色紙、短冊が、さころ狭いまで壁面を埋めてゐる。

その他、川柳手拭、川柳スタンプ、川柳板書、川柳ネクタイ、川柳牛襟、全國柳誌、川柳に關する單行本並びに全集、故井上劍花坊書翰、川柳記事スクラップ、川柳を書いた朝鮮の洗濯棒、川柳小皿、川柳達磨、川柳風鈴、川柳家年賀狀、川

柳マツチ、川柳團扇、路郎葎乃の肖像額、川柳ハガキ、席題句箋等々々仔細に見ればその多種多様な出品に驚くの外はない。出品者の雅號だけでも採録したいが、誌面がないので割愛する。



× 多大の犠牲を拂つて、短時日の間にこれだけのものを蒐め得たことは幹事、石曾根民郎君のお手柄である師範學校や中學校や女學校の職員をはじめ、學生達が



多數入場しただけでも地方文化に資する點が少くなくつたことを賞揚したい。が、しかし高處に立つて今回の川柳趣味展覧會を一べつすれば、未だ作品の取舍選擇によるレベルの向上に思ひを至さなければならぬことを痛切に感じた。第二次、第三次の川柳趣味展に期待する所以である。(寫眞は會場の狀景)



一路集

募集句

魚

森 東 魚 選

出養生散步がてらの魚を買ふ 正種

魚屋の聲から市場活氣づき 同

飛魚の機嫌に逢つた帆前船 葉光

塩焼の鯛の姿もお目出度し 同

小使の夫婦秋刀魚の膳に付き 猫通人

魚屋の剩錢を奥さんきたなが、 同

魚釣へうつかり 邪魔な舟遊び さわだ

いきのいゝ聲で魚や置いて行、 同

歸省して小川の雑魚をなつとよ 白舍

商用の旅に刺身を喰ひあきる 同

大漁の魚へ朝の陽があたり 斗風

寶塚風景一句

アパートの窓より魚を釣る娘 同

人 (賞)

水族館魚の死ぬ日を考へる 浪二

地 (賞)

蘇生さすやうに扱ふ冷凍魚 其奥

天 (賞)

冷凍魚無念無想の曲りやう 宵明

一 路 集

魚屋に片身宛賣る客が出來 喜由

魚屋の持つ庖丁の素晴らしさ 菊路

人間の腫を水族館の魚は馴れ 春草

笹折をはみ出してゐる魚の尾 靜波

釣り上げた魚に海の星明らか 由布

仰山に河豚釣り上げる海水着 雨城

魚釣りを覚えて暑い日が續き 水客

魚籠の中皆んなのきと通り過ぎ 骨人坊

避暑客の自炊へ魚賣りに來る 春集

魚市場喧嘩のやうな聲で賣り 正一

魚狙ふ猫の眼とヒョイと合じ 向上庵

魚屋の子で魚屋の香する 佐保蘭

魚釣る鑑札もあり後備役 文庫

魚やの猫鼻先を又いかれ 曉童

祝鯛禱はづして母の出る 木履

颱風の副産と云ふ魚がとれ 没食子

釣り上げたところを先生が通り 灯竿

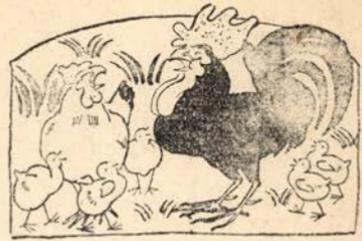
トラツクの音へ小川の魚沈み 澄風

釣つて來た魚の始末にも困り 觀月

秋刀魚やくにほひた、き長屋 的板花

恵比壽様必ず鯛ときめて釣り 千隈

水族館魚諦めた泳ぎやう 其奥



柳誌合評

燈火に語る

高須啞三味
福田山雨樓

氏の識見を物語つてゐると思ふ。

樓——雀郎氏の自信の強さ、底力に僕は舌を巻いてゐる一人である。創刊當時の勢ひでぐん／＼押して行つて貰ひたいと思ふ。

味——特殊な研究を發表されてゐる本誌は句會などは第二として、雑誌本位に進んで貰ふことを切望する。

今東京で問題になつてゐる川柳連作は、雀郎氏が俳句の花園から移し植えた種である。

樓——その意味で雀郎氏にも少し指導的な立場にあつて連作の研究と唱導に盡すべきではあるまいか。但し僕自身としては連作に賛し難い。

○芥子粒

樓——眞面目な同人が揃つてゐることに好感がもてる。筆の立つ人や進歩的な作家が多くと擁護してゐる。新らしい問題に対する把握が鋭敏であり熱心である。俳壇の一部から代表的な柳誌として見られたこともある。

味——兎に角讀み物の少い柳誌中にあつて

○昭和川柳

味——スマートな雑誌、印刷が奇麗で誤植の少い點など確かに敬服に値する。讀者に巧みに交渉をもつてゐることも見逃せない。

樓——塊人氏が「古今川柳評論」を銘打つて健筆を振つてゐるのは壯觀である。所信をあんなに勇敢に發表する態度は見上げたものだと思ふ。編輯振には「番傘」から派生したものだからと云ふ先入主があるからかも知れぬが、その姉妹誌と云つた印象を覆ふことが出来ない。

味——同人が分擔して選をしたり物を書く

なんか「番傘」のやり方を踏襲してゐるところで「自由課題吟」と云ふ欄があるが（これを非常に感心してゐた人もあつたが）あれは雑誌と別段變つたところはないと思ふ。

樓——作句奨励の一助を試みたものか、誌面の變化をねらつてゐるに過ぎないやうですれ。

○せんりう

味——第一俳句に關心を持ち、始めから俳壇を所謂假裝敵國として生れたことは、雀郎氏でなくては出来ないことであり、

長い評論に對して多くのスペースを割いてゐることは特色と云つていい。

『芥子粒』が不斷傳統川柳のそばに附いてゐながら、自由律川柳其の他の新しい傾向を開拓しようとしてゐる熱心な態度はえらいと思ふ。新興川柳などででは兎角犬の遠吠式であり勝ちなのだ。

禮——この頃丘翁、犇郎兩氏の健筆が見當らないことは淋しい。

○ふあうすと

禮——柳壇の中央公論を指して勵進する

この柳誌、僕は雑誌が届く毎に清新な匂ひを感じずにはゐられない。同時に紋太氏の粘着力と作句精進に頭を下げてゐる味——スペースを一行と雖も無駄にせず行き届いた編輯を毎號見て感心してゐる。一時は雑詠投句者が全國柳誌を壓してゐたことがあると云はれてゐる位で、最近の躍進は目覺ましい。

禮——主要な寄稿に對して謝禮を贈つたこと云ふことが出てゐたが、柳誌もそこ迄行きたいものだと思ふ。

味——傳統系であつて新興系に觸れようとし

てゐる。その進歩的な歩み方が目につく雑詠なんかでもいろいろの傾向を寛容に受け入れてゐる甘さ、若さなどにも人氣があるのではあるまいか。

○きやり

味——十一月號から編輯を花戀坊、巨呂平

兩君に任されたこの事であるが、既往あれだけの傳統と品格を備へた柳誌だけに仲々骨折りであらうと思ふ。しかし兩君が力一ぱいにその情熱を傾けてゐられる事を多とする。十一月號ではまだその特色を發見出来なかつたが、逐次ヒットを飛ばされる様待望する。

禮——川柳時評を陣居氏が毎號執筆されてゐるが、時評と云ふものゝ缺くべからざるものであるとする僕としては、大變結構なところと思ふ。しかし陣居氏の筆觸が最近の出來事に對してあまりに謳歌を續けてゐるのを、容易な心持ちでは眺めてゐるものゝ稍齒がゆくと思ふ。

味——大柳誌『きやり』としてばもつと讀物が欲しいと思ふ。尤も十一月號の『明窓獨語』と『不連續線』はかなり手きびしく

云つてゐる。

禮——周魚氏が毎年巻頭に書かれることは大變温穩で氏の風格がよく表はれてゐるが、十一月號はヒリッソ來ましたね。感云へば裸の周魚、人間周魚の聲が聞きたいと思ふ。もつと川柳に提げられた言説を發表して欲しいと思ふ。

○川柳地帯

味——『知古』が川柳の傳統を守つて勵進

せんとしてゐるところへ『川柳よこばま』『川柳地帯』が續いて發刊され、三派鼎立してお互ひに啓發してゐるのはいゝ事だと思ふ。

禮——『川柳地帯』は斷然異色である。川柳以外の記事も載せるが、句は募集しない小品もあれば紀行もあり俳人を論じたものもある。しかしそれ等がちつとも目障りにならず、右近、斗酒氏等の鏡角で、滋味のある筆致のみが鏡等に迫る。恐ろしく魅力のある雑誌だと思ふ。

味——斗酒、右近、天邪鬼と少くも三人の異色ある作家が提携してゐる事は、何となく大なる強味である。雑誌の美しさ

も眼立つてゐるが、誤植が皆無と云つていゝ程、妙いのは氣持がよい。

樓——僕は特に注文がある。評論家右近氏の堂々たる評論を、斗酒氏のそれと共に毎號掲載されたい事だ。右近氏に若さを以つて立上つて貰ひたい事だ。

○京

樓——京都川柳社が二十五周年を迎へたことに先づ敬意を表する。番傘川柳社、みちのく川柳社と共に日本で最も古くから續いてゐる吟社として、柳界に盡した不斷の功績を忘れてはならぬ。實に京都にふさはしい温和な粘り氣のある吟社である。

味——古い川柳家の粒が揃つてゐる事も今日の大成を見た所以であらう。

○川 柳 草 薙

味——「京」と同じやうに東京と大阪の間にある雑誌だが、同人の粒が揃つてゐるので時々見應えのある雑誌である。

樓——興亡恒なき中京柳壇にあつて、よくその本壘を守つて、がつしりミスケラムを

組んでゐることは尊い。

○川 柳 研 究

味——このごろ幹事の数が順に増加して句會なども大いに活況を呈してゐるのは目覺ましい。

樓——三太郎氏の東北方面開拓振りは實に素晴らしい勢ひで、燎原の火の如く擴がつてゐる。「東北川柳」と合流してから鬼に金棒と云つた形、柳壇の爲め祝福に堪えない。殊に最近三太郎氏が毎號執筆してゐられる事は月難い。僕の常に思ふことであるが、先覺者が充分その力を出し切つて行くこと云ふ事は——そしてまた柳壇がさうせしめる事は——川柳を直進せしむる能だと思ふ。新進氣鋭の士が活躍する事も元より必要だが、先輩が先輩としての立場で、ピンチを打つことはより必要だと思ふ。その意味から三太郎氏の近業に心から感謝の念を捧げるものである。

味——幹事鬼佛、車山、六佳史その他の諸君が、よく三太郎氏の股肱となつて奮闘してゐられる事は敬服に堪えないと同時に、同氏を幸福だと思ふ。けれども本誌

が「東北川柳」と合流した事については異論がある。勿論五花村、三太郎のタイアップは非常にいい事であるが、「東北川柳」を止した事には考慮の餘地があつたと思ふ。現に白河方面にはそこに不満を持つ柳人があること云ふやうなことを聞くのは、その間の消息を物語るものではあるまいか。

樓——柳誌の合流と云ふ事は嬉をさる様なもので、豫想がつかず結果論でないに當りませぬ。それとも一つ、お互ひに心の觸れ合つた仲でないといけないうちやないですか。

○番 傘

樓——來春早々二十五周年記念事業をやる大計畫を發表してゐるころ、流石に大番傘だと思ふ。祝に堪えない。と同時に水府氏の絶大なる努力と熱意に對して萬腔の敬意を表するものである。柳壇の盛事と云はなければならぬ。

味——兎に角あれだけの大世界に盛り立つたところはえらいと思ふ。何處迄も同人中心主義で進みそしてそのやり方で、多

年刺棘の道を切開き乍ら今日を樂き上げ
たことは、見方によれば『番傘』を小さ
いものにしてゐるけれども、今にして思
へばそのやり方が賢明だったのだとも云
へよう。

樓——同人中心主義とは云ふものゝ、水府
氏を中心に同人が尊敬し合ひ信頼し合つ
て、親密の度を深めることに重點をおい
て行く事が大變にいいので、番傘のよき
もそこにあると思ふ。川柳を通じて心か
ら打ちさげると云ふ羨ましき親密ぶり
は眞に力強いものを感じる。殊に同誌は
近頃新進の人達が句に柳論に大いに新ら
しいところを見せてゐるのが著しく眼に
つく。

味——一人々々のスペースを割當てたやう
な編輯振りが見え、これはある方針から
出たのであらうけれども恰度ビルヂン
グ式で、一つ／＼變に小さく纏まつてゐ
て伸び／＼したもので、大部な研究と云
つたやうなものは殆んど見當らぬのが物
足らぬところである。

味——二人が急に寄り合つて合評を思ひ立

つたので、手許になかつた柳誌もあり、
言及出来なかつた雑誌も少くない事は遺
憾である。

樓——この合評では柳誌の特長を尊重する
事に重きをおいたので、勢ひ賞讃の言葉

第二 川・協・の・頁

一部の柳人へ

「話せば判る」と大養毅はピストル
の前でも敢然と云ひ放つた。

わが川・協も話せば判る筈だ。判

つても判らぬ顔でデマを飛ばす連中
に用はない。眞に川柳を愛するなら
ば何故親しく路耶と膝を交しへて論
難しないのか。要は柳界の將來を三
思して創立した川・協ではないか。

川・協そのものゝ趣旨はいゝが路
耶のやうに、白を白だま齒に衣着せ
ぬ物の云ひ方をする人間に出来る仕
事ではないと云ふ聲も聞くが、白を白
だま云ひ得ない人間にはなほ更出來
る仕事ではない。

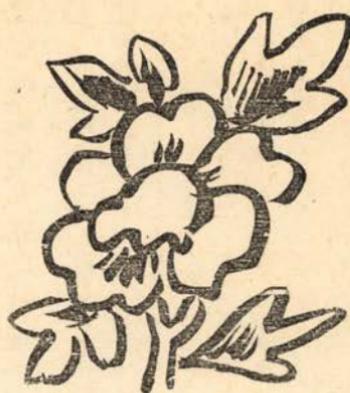
徒らに反感を持つて、自らの墓穴
を掘る眞似はしない方がいい。

山・陰・雜・記

が多くなつたが、心にもないことは言つ
てゐないつもりである。それから紙面が
許さないので創作にはちつとも觸れなかつ
たが、これは又他日稿を更めて試みる
こととする。

▼十月十七日出雲今市で川柳雜誌社
箴川支部の十周年記念川柳大會が開
催された。その席上で私は祝辭を述
べ、柳話をなし、次いで川柳人協會
に就いて語つた。

▼即夜、今市を立ち松江一泊。翌十
八日勝谷山川見君と共に松陽新報社
に米村あん馬氏を訪ひ更に公會堂で
松江川柳人の二三を語る。午後三時
松江を發し、夕べ六時鳥取着、支部
幹事中山鐵洲君に迎えられ川・雜及
び川協を談じ十二時近く鳥取を辭し
十九日拂曉歸阪した。(路耶)



川柳塔

橋本緑雨

白雲がとゞまり秋の空高し

春日の丘

赤松の土地にしたしむ氣で暮し

水谷鮎美

みのる秋鮮人小屋も窓をあけ

俗人にある日の木魚なでられる

兒の下駄をそろへる父の苦勞性

川柳雜誌社京阪神各支部聯合

忘年川柳大會

緊張々々で押して來た川柳道精進の堰を一舉に切つて落す京阪神各支部聯合主催の忘年川柳大會は、本年を以つて堂々第十回、柳人渴望の句薙が展開されることになりました。加ふるに麻生路郎師が川柳人協會を創立され柳界のために熱と力を以つて益々活躍される事を誓はれた記念すべき年なのであります。この二重の喜びを以つて、今年こそ忘れる事の出来ない興趣ある大會にしたいと幹事一同總がかりで腕によりをかけてゐます。御承知の通り當夜は桁を外づした賑やかな句會でありますから柳人交驩の意味から多數御友人を誘ひ合され御來場下さるやう切におまち致します。

日時 十二月十三日(日曜日) 夜六時半

會場 道頓堀俱樂部 大阪市南区日本橋南詰 東入南側(電南二七四八)

司會者 後藤青兒

開會之辭

兼題 髭 (三句)

同 炭俵 (三句) 朝田新水 麻生路郎氏選 橋本緑雨氏選

同 講演 漫談「川柳人打診」 麻生路郎氏 庄萬よし氏

同 閉會之辭 政界ユーモア 西田艸樂

會費 三〇錢(川柳人協會員章提示の方は二〇錢)

まごころの武器なき人の合唱よ

喜多春秋

憤慨をする壇上の若い顔

からかつてやらうと女大膽な

つゝましくきつちり處女の襟が合ひ

辛抱をする口惜しさをしやくりあげ

西村明珠

釣りに行く日が大層にからかはれ

値切られて商賣上手笑ふだけ

酒はのめますかと聞かれほつとする

空つぼの頭で盛り場を歩き

壁にまり投げて明日は日曜日

後藤青兒

御隣の物干竹はヒステリー

十五圓の家で蘆屋に住んで居る

案山子のやうに終る停年

賞品 天、地、人、五客、十秀（早賞）

（但し出席者に限る）

優勝盃

兼題、席題を通じての最高點者へ呈上大阪

名所川柳繪葉書及び川柳マツチ（麻生路郎氏執筆）

其他粗品を出席者全部に呈上。川柳雜誌社スタンプ

は當夜會場に備付けてありますから御自由に御使ひ

下さい。（鉛筆持参願います）

支部と幹事

道頓堀支部 庄萬よし

神戸支部 喜多春秋

螢ヶ池支部 羽流之介

御旅支部 江戸みつる

鶴町支部 宮岡白峰

大鐵局支部 山本喜山

今里支部 市場没食子

光笑會 永田里十九

兵庫支部 三崎陽幸

主催 川柳雜誌社

京阪神支部聯合

忘年川柳大會事務所

大阪市南區疊屋町六

カナメ喫茶店（電南七五五二）

永田里十九方

後援

川柳雜誌社

大阪市西成區玉出本通三

電話天下茶屋二五七九番

各 地 柳 壇

見送りの港に風が強く吹き
沖仲仕港の荒れた晝を酔ひ
月が出て港は急に神秘めき
妻子ある身に港あり女あり
友歸る港に朝日こぼれてる
何處の首に移民の顔の青めける

港 別れ 日本晴 勝手口 水
葉書

三崎陽幸報

九月二十二日 於和田通り衛生事務所

川柳雜誌社 兵庫支部 岬柳社句報 (兵庫)

殺陣に冷房装置の寒さかな
月形に想ひばをなじ三名花
熱演の杖つく大刀がうわるなり
花道の視線の中の半平太
身は酔へど酔へぬ心の半平太
月形へ妓に意地がありすぎる

月形半平太

林朝風報

九月十八日 夜於歌舞伎座

川柳雜誌社 梅田支部 観月を圍む會

富士登山温泉宿へ流れ込み
温泉に行かればならぬ不仕合せ
ろくで無い事を覚えて色眼鏡
新聞へ眼鏡も揃へて子供来る
晝寝から起きて眼鏡のありごころ

船割りし船頭若し港口
海へ空へ秋の港の銅鑼がきへ
驟雨の港へ下駄が流れ着き
携げてゐる土産へ港の灯がうつり
港まで子供を連れて疲ひれる
港あてテープは雨にぬれて切れ
秋晴れの棧橋トンボ飛んで来る
棧橋の揺れも嬉しく出迎へる
豪華船着いた港に力車ある
西向けて發つに港は明るすぎ
汽笛から港の朝はゆるく明く
入港は眞近故國の風が吹き
あかつきの港が見て起される
別ればならず港の灯は赤し
ごしや降りへ別れの聲が低く過る
お別れに涙は派手な色で来る
では之で後が言へない別れです
身に過ぎた戀なり別れ強ひられる
別れさもなく落は砂の音つやく
別れ際母ハンカチを持つてゐる
送別は大臣たらん友に泣き
別れ今握手の汗をふこ感じ
いざ別れ言葉の固き笑ひ合ひ
いつたんの別れに男情がなし
永遠の別れ靈柩車は動く
給出する友へテープが早く切れ
感激を胸へパイのテープ切れ
惜別のおげさが赤い灯に出です
別れる日逢へす半紙も長くなり

山玉 山行 某人 敏郎 華水 某人 水客 木履 雲泥 久米雄 尖里 久米雄 吉左右 明球 省三 砂丘 香行 水客 明珠 山玉 久米雄 一光 喜左右 喜山 潔服 正處 潔

轉宅へ女子の別れする
見送りも落葉の山で別れたり
晴れ切つたそれも別れの哀愁か
ふたありの足が揃ふた日本晴れ
隣村の大鼓がひびく日本晴れ
日本晴れ約束の時間すぎて
汗出して歸る子がある日本晴れ
もう何も讀むものがなく日本晴れ
隠居所に猫が這ひ出た日本晴れ
日本晴れ裏の扉からまりが来る
抱いた子が大きく笑ふ日本晴れ
勝手口出會頭に牛乳来
銅錢の音ばかりして勝手口
空瓶がキチンと立つた勝手口
泥つけた子が泣いて来る勝手口
妻の愚痴勝手口の狭いこまにふれ
丹前の亭主さもある勝手口
勝手口八百屋は下女に叱られる
花に水やつく隠居の涼しさう
井戸水の冷たさを知る故郷の寺
れいれいしく市長の新願小雨降る
水ん手に揃へば故郷の匂のあり
手の水を切つて小銭の用があり
噴水を圍こみ樂しい顔ばかり
お替の水へ呼びリンパッき過ぎ
中年で故郷を離れた水の味
薄俸のすぐその土地の水に馴れ

喜山 奈落 某人 喜山 久米雄 水客 明珠 某人 吉左右 一人 水客 華水 流泉 喜山 吉左右 香行 流泉 喜山 一光 久米雄 某人 喜山 某人 同

貯水池の秋は軍歌が聞こえて來
 性分を知つて葉書無駄を入れ
 健康になつて葉書の字がくすれ
 斷りを書けば端書がせますぎる
 故郷より代筆らしい葉書着き
 代筆の葉書文句が若すぎる
 女中年葉書で事をすますなり
 遍路への端書札所は秋さなり
 友の家葉書で探すやいこしき
 採用の葉書かれぐ、投込まれ
 驛夫また折つた葉書を言傳まり
 繪葉書のごこへは行かぬ旅だより
 葉書一枚滿洲の友元氣なり

水客 吉左右 華水 同 潔 三交 某人 水客 吞行 某人 水客 某人 吉左右 静水

初代川柳急句報 (松山)

九月二十三日 於松山高野山

酒井大樓報 香煙 何毛子 眩水 柳水 雨眠 春童

魂をつい蝕んだ生活苦
 お灯籠魂が出さうに揺れており
 戦友の魂へ戦勝ラッパの音
 魂は知らず金々々に活き
 魂の出には窓さきめてやり
 魂は抜けて居るなり懐ろ手
 魂は東京に有り講義録
 名人は魂ばかり残しこき
 魂の入替さして意見すみ
 魂は買ふてはくれぬ紹介所
 振舞の酒に魂までも酔ひ
 精魂を打込む鐵へ空は晴れ

何毛子 眩水 柳水 雨眠 春童 羊我 桐子 文庫 向上庵 曉童 承春 其沙子

魂さ云ふ不可解な諦めよ
 魂を形で見せた位牌なり
 魂を忘れた顔へ蠅が来る
 指揮刀へ魂線を越へんとす
 呼吸して居る魂の不倅
 魂を奪はれて居て面白し
 魂を打込む槌へ注連を張り
 秋の夜の我魂は壺抱く
 日本魂かく夢飯を食つて生き
 魂の台座の様な下駄二足
 魂を二つ持つて儲けて居
 魂を喰つてする美しき
 米粒に日本魂養はん
 魂の底が知れない日章旗
 魂に活殺があり處世術
 手繰る戸へ朝霧そうと流れ込む
 見覺へのネオン見へ来る霧の町
 山の村霧の中から顔を出し
 信號は霧空中に無電飛ぶ
 霧程の香水床屋アんとかけ
 霧の中真珠の様に灯がさもり
 朝霧に出た地下足袋が儲からず
 機上から緋の様な霧を見る
 朝霧霧を抜けてバサリと配達夫
 燈臺の親子に深い霧さなり
 朝霧を浴びて自信の鉄をふり
 霧が来てキヤンブ人聲だけ残り
 探る様に汽笛濃霧へ呼びかける
 霧晴れておれから見る花鳥
 えらい霧だったよそ母朝詣り

同 剗一路 楓影 大觀 浩笑子 米花呂 大觀 五健 向上庵 通風筒 楓影 文庫 河鹿 耕一路 曉童 香方 何毛子 英賀夫 亂蛙樓 雨城 承春 宵明 大觀

自動車徐行へ霧の迫り来る
 霧の夜を光るネオンの色淋し
 セロハンを割く様に霧晴れるなり
 むし風呂さ夜霧の町が似ておつた
 名物にしては土産に成らぬ霧
 働きにゆく娘へ深い霧が降り
 さよならの聲だけ霧へ残りたり
 霧を出る姿藝術寫眞さか
 霧の海にいつてゆけば行けさうよ
 ケーブルの窓をかすめる流れ霧
 サリーブスのマツチを受ける鼻の先
 値切られた上に抽籤券が入り
 逆ふて見るサリーブスのコツもあり
 サリーブスを盾にもてない儘歸る
 植木屋のサリーブス松のこんな枝
 サリーブスに來た奴がグラスあけて行き
 サリーブスの包んだ上へ一つ添へ
 サリーブスの包んだ上へ一つ添へ
 サリーブスに取まかれてる今日は暇
 サリーブスの券がたまつた小抽斗
 サリーブスはこれの通り疊替へ
 サリーブスの頭も叩く散髪屋
 サリーブスのそれさ遠ふ日を感じ
 サリーブスに出る番頭のばげて居る
 サリーブスの一つに首へぶらさがり
 子をあやす餘裕もあつてバスガール
 サリーブスをさう遠へたか酔ふて居る
 サリーブスへ早合點の猪口を乾し
 サリーブスにしても淋しい嘘をき
 サリーブスに魂しかさ捕へられ

半我 天明 耕一路 河鹿 漫歩 極童 春童 曉童 靈子 大樓 曉童 漫歩 柳水 大觀 雨城 何毛子 半我



柳界展望

全國川柳界のこゝ、各地川柳家の一擧手一投足をこの展望欄ですぐわかる様にしたい。皆様の御通信を歓迎する。

催し

▲川柳雜誌社京阪神支部聯合忘年川柳大會の幹事會は十月二十五日夜その計畫事務所(カナメ喫茶店階上)で開かれた。差支のために參會不能の幹事もあつたが、本社から路郎の出席を得て、路郎、里十九、豆秋、春秋みつる、白峰、機見女等が集合まるで春が来たやうな賑やかな談笑裡に着々計畫が進められた

(四二頁参照)

▲十月二十二日の夜、改築後の縁雨居で久しぶりの偶會が開か

寄書を頂く。
▲阪大川柳會十月例会は二十六日夕、惠濟會館三階に於て路郎師を迎へ開催された。
▲住友金屬鑛業所親友會(尼崎)の例会が十月二十七日夜、路郎師を迎へて同所内で開かれた。
▲第九回而笑子忌を十月三十一日五健居で營まれた由松山支部幹事酒井大棟君から報らせがあつた。

吟社の創立

▲能代港の「木の香吟社」と「川柳能代吟社」が合併されて「能代筏吟社」が生れた由、御發展を祈る。

創刊と廢刊

▲大阪赤十字社内に日本赤十字社療養院川柳會が生れ、同時に會報第一號が發刊された由。

▲國境吟社發行の月刊「五色」は九月號を以つて當分の間休刊される旨の通知を頂いたが、遠く國境にあつて氣を吐いてゐただ

柳誌要目 (十月號)

鑑賞十句(柳樽初篇から)

櫻井六葉(梅鉢)

柳樽拾遺論講

森東魚、花岡百樹(番傘)

漢詩三川柳

水川浮沈子(番傘)

明るくなつた川柳壇を見よ

(時評)

品川陣居(川柳きやり)

柳壇の外廊を見る

岸 如葉(秋田川柳)

柳窓漫筆

和田天民子(川柳俱樂部)

何氣なき句

川上三太郎(川柳研究)

公娼と私娼(徳川時代から昭和の警察)

植木鬼佛(川柳研究)

自由律川柳の是非(一)

木村半文錢(氷原)

川柳新興派の心臓

川上日車(氷原)

けに一沫の寂びしさを思はされ
る復活の日の速かならんことを
祈る。

消 息

▲橋本縁雨君(大阪)は十月六日
石清水八幡参詣後宇治に遊ばれ
た。

▲馬場浪二君(丸龜)は四日白峯
寺に詣でられたとの事

▲川柳雜誌社兼川支部の十周年
記念大會は九月十七日路郎師を
迎へて盛大に行はれたが、米子か
ら美笑君同乗し、その大會に參
加され、同じく翠夢君は伯備線
經由で、同大會に參加された。

▲須崎豆秋君(大阪)は七日商用
で神戸に出張、三の宮の阪急食
堂から秋色に包まれた生田の森
を指呼の間に望み食後散歩して
前號の原稿を寄せられた。尙當
日出口雨町君に久しぶりで逢は
れたとの事。十三日は午後から
校正の應援をして頂いた。

▲川柳雜誌社今治支部の會は十

月十三日に開催され、柳石、心
府、香方、皆明、文庫の諸君か
ら寄書を頂く。

▲「壺」出版の記念大會は五十五
名の參會者を得て盛大に終了さ
れたとの事、不浪人、三大郎、
よし丸、久男、蝶五郎、霜鳥、
甲吉、天五郎の諸君から寄書を
頂く。

▲濱田久米雄君は十月十日午前
十時發の列車で單身、廣島へ榮
轉された。

▲西村明珠君(神戸)は十月十五
六、七の三日間を利用して、下
呂、中山七里、金澤、山中、東
尋坊方面に遊ばれ、「寝轉ろん
で書ける端書も旅の宿」の句を
寄せらる。次に同月廿五日嵐山
高雄、愛宕山方面へ廻遊された
給葉書だよりを頂いた。

▲谷村みゆる君(大阪)も十六日
の夜行で下呂に遊び、「山紫水明
金があつたらなご思ひ」の句を
寄せられた。

▲村瀬琴泉君(大阪)は一時川柳
を中絶してゐられたが、今後も
つと／＼眞面目に作句三昧に這
入りたき旨の御たよりに接した

▲川柳みちのく吟社(青森)では
十月號をもつて二百號を發行さ
れたが、みちのく二百號を祝ふ言
葉として、麻生路郎、村田周魚
川上三大郎、相元紋大、岸本水
府の諸君が執筆されてゐる。

▲西いわを君(大阪)は家族連れ
で夫人の郷里に遊ばれ、二十三
日阿蘇山上から「灰色の山大阿
蘇の峰に立ち」の句を寄せられ
た。

▲川柳雜誌社塗青支部幹事をし
てゐた故熊谷紅君(大阪)の碑が
岸上商店の手によつて立てられ
た。その供養式が十月二十四日
天王寺で営まれたが、同店主の
温い心やりが伺はれる、尙これ
を機會に、塗青支部を復活しよ
うではないか、店主錦石君はじ
め元山君熱をあげてゐる。

川柳が詩としての形態(一)
南部菊太郎(氷原)
現實と現實主義

川上日車(川柳地帯)
柳楳を形態づける基本的用語の
文法的解説(四)

木村牛文錢(むさしの)
川柳詞林采要(其の八)

穂谷摩耶火(むさしの)
捨てた句の中から

川上日車(松羅子)
短きもの 川上日車(川柳ビル)

心境の變化(古川柳評論の十)
堀口塊人(昭和川柳)

川柳國名盡(八)
大田秋水(靜岡川柳)

青明の表現技巧(青明句集の鑑
賞) 木村牛文錢(ふあうすき)

青明研究の一斷面
川上日車(ふあうすき)

癡十窟談義
蛭子省二(湯の村)

氣まゝに句を作ること
齋藤松窓(同人)

▲本社賛助員國枝四郎君(東京)は文士生活をやめてダンス教授をされる旨聲明された。

▲長崎柳秀博士(大阪)は十月二十九日軍艦羽黒から陪觀記念の繪葉書を寄せられた。

▲前號掲載の「伊東夜叉耶の思ひ出」を令弟伊藤武文君に贈呈した所「前略家庭外に於ける半面を十年後の今日始めて知るなつかしさ、柳人交友の深きなさを思ひ合せ、兄もよき友を持ちたるものかなと、一層各位の尊敬を深めたる次第に御座候(中略)本誌は永らく保存仕り目下小生の手許にて教育中の二子成長の折御厚意を拜讀致さ度と存じ候、(下略)の御便りに接した。

▲大田白外郎君(埼玉)並びに小森咲星君(京都)は川柳きやり吟社の同人とされた。

▲京都川柳社廿五周年記念大會には本社から藤生路郎君も出席

の豫定であつたが、病氣のためやむなく中止された。

▲住田亂耽君(兵庫)は身邊多忙俗事に追ひまわられて、大阪の土も久しく踏みませんの便りに接した。

▲伊藤藤天君(東京)は松竹少女歌劇内にS・S・K漫畫研究部が創設されその主任に推された由お喜び申上げる。

▲昭和川柳社(大阪)では松本洋斗、小諸南亭、有馬笑太の諸君を新同人として迎へられた。

▲北支那張家口東安大街にゐられる岩崎松代女(柳路夫人)がはる／＼故國へ歸られるとの報に十月中旬より鶴首してゐた歳十一月一日に夫人の令妹綾子さんの訪問を受けた。松代さんは多忙のため歸國されなかつたこと、こゝ柳路夫妻元氣に活躍されてゐる由を傳へき、はるかに此上乍らの多幸を祈つた。

▲森立名君(大阪)は堂ビル内の

撫順炭販賣株式會社に勤務してゐられたが、此度滿鐵及滿洲炭礦株式會社の販賣關係事務一切を繼承して十月一日創立された日滿商事株式會社(滿洲國名日滿商事股份有限公司)に併合されたので、引續き同社大阪支店に勤務されてゐる由。

▲福田山雨樓君(川柳雜誌社東京支社長)は、最近益々活躍してゐられるが、十月十四日、松丘町二君の訪問をうけ、二時間程昔話をされたおたよりに接した。

▲西田柳樂君(大阪)は、近時多忙で、綠雨居偶會(も、支部聯合の幹事會へもやむなく欠席された。

▲蛭子倉二君(川柳人協會名譽會員)の御たよりの一節「先月別府行き準備をしてゐた處どういふ事か私の氣が進まず延び／＼の中に曾て貴誌上にカットさなつた私の犬が重患、獸醫及

撫順炭販賣株式會社に勤務してゐられたが、此度滿鐵及滿洲炭礦株式會社の販賣關係事務一切を繼承して十月一日創立された日滿商事株式會社(滿洲國名日滿商事股份有限公司)に併合されたので、引續き同社大阪支店に勤務されてゐる由。

川柳家戸籍調(續)

(係) 綠 雨

- (1) 姓名、(2) 雅號及別號、(3) 生年月日、(4) 出生地、(5) 現住所、(6) 職業又は勤務先、(7) 好きな句、(8) 自信の句、(9) 川柳以外の趣味(10) 配偶者子供の有無、(11) 嫌ひなもの、(12) 川柳に手を染めた年月

(492) 加波澤六

- (1) 加波澤六郎 (2) 瞑想居六 (3) 明治廿九年四月十日生 (4) 茨城縣水戸市 (5) 東京市目黒區洗足一二九三 (6) 國民新聞社社員 (7) 隙間から見れば何でもない夫婦(すっか) 金持つて石の形が面白し(癖好) (8) お米屋へ行く鶏ば連れがあり。稼ぎい、陽だ梨賣の澄んだ聲 (9) スポーツ一切——特に野球 (10) 妻あり、二男一女 (11) 嘔吐きぞ微慢 (12) 昭和二年

び夫妻にて晝夜さなき手當看護の効なく八日後に死す。かなり大きい犬であり赤ン坊の時から育て十三年となる、悲嘆やる方なし、留守中の出来事でなかつたのがセメテもの慰め、實は別府行挫折の理由なのであります。この事御同情申上げる。

慶 弔

▲丸山卯生君(神戸)の令閨が十月六日に逝去された由、謹んで哀悼の意を表する。

▲鳥山一步君(川柳雜誌社客員)の御子息隆盛君は三才の可愛盛りを一期に十月七日朝他界された。同君の胸中を深くお察し申上げる。

改 號

▲千丸喜舟君は喜秋(石川)
▲鈴木大砲君は背吾(大阪)
▲橋本珍山君は雄午(大阪)
▲山城みどり君は容子(京都)
▲濱田久米雄君(廣島市仁保町

轉 居

青崎一〇八(一)

▲妹尾變人君(大阪府泉北郡鳳町北王子二二四ノ一)

▲植山九天君(廣島市東雲町五五八)
▲中山凡路君(大阪住吉區山



▲濱田久米雄君送別句會

(句報別項參照)

(前列向つて右より)

朝村、喜山、久米雄、陽

幸、靜水、潔、山玉

(中列向つて右より)

砂丘、奈落、水客、某人

三交、一服、尖里、徒步

(後列向つて右より)

吉左右、一光、省三、雲

泥、流泉、明珠、五平、

華水、軍士、吞行の諸君

▲小堀矢車君(東京市牛込區戸山町二三)

▲大植柳月君(東京市王子區下十條町一八)

▲坂町一ノ十一(一)

▲日下部舟可君(筑後柳河城内本町)

▲寺井紅太郎君(千葉縣大原町

(493) 木村 芽柳

(1) 木村治郎 (2) 芽柳(山上居)

(3) 明治三十六年四月二十五日生

(4) 宮城縣石卷市旭町 (5) 東京市

大森區市野倉町一二九 (6) 國民

新聞社々員 (7) 月へ投げ草へ捨てたる踊の手(古川柳) 蟲の音

は家の中なり雨つつき(啞三昧)

(8) 夏座敷留守居は風をほしいま

い。小庵にかいばりもなく伸び

る萩 (9) スポーツ (10) 妻との

間に一女あり (11) 世辭 (12)

昭和七年頃

(494) 西村 房之

(1) 西村房之介 (2) 房之、晋三

(3) 明治四十一年十月 (4) 東京市

神田區 (5) 東京市澁谷區豊澤町

三十一 (6) 活版植字工 (7) 仲見

世の雨は傘から傘へ抜け(太郎

丸) 音のせめ花火ばかりを母は

買ひ(啞三昧) (8) 久瀧の友さ故

郷の鳥瞰圖、割引は電車が違ひ

先で待ち (9) 劍道、江戸文學、

野球 (10) 未だ獨身 (11) 愚痴

- ▲新田九三〇四ノ四(一)
- ▲田中不倒人君(京都市左京區田中高原町四九、奥村方)
- ▲任田閃火君(東京市下谷區竹町二〇〇)
- ▲栗原伸大期君(東京市江戸川區西小松川二ノ一〇三〇)
- ▲加藤石猿君(東京市澁橋區上落合一ノ一七一)
- ▲高須啞三味君(東京市蒲田區女塚町二〇三)
- ▲中村欣治郎君(福岡市千代町三丁目)
- ▲松浦末雄君(大阪市此花區春日出町北港住宅三一九ノ一盛川方)
- ▲石橋初太郎君(番地改正の結果東京市蒲田區小林町四〇九)
- ▲福田浮鬼君(朝鮮新義州府老松町三番地小野方)
- ▲中井花柳子君(東京市京橋區月島東河岸、四ノ五ノ二)
- ▲帆傘川柳社(番地改正の結果

- 高知市本與力町三二二)
- ▲鳥山一步君(大阪市東淀川區國次町二九七)
- ▲加藤ライト君(大阪市大正區鶴町三ノ一三六)
- ▲山本砂丘君(神戸市林田區宮川町四ノ二六坂井方)
- ▲「雨の日の集ひ」を小樽の伊東千龍君が發行された。
- ▲都民新聞を發行してゐる庄方よし君は「ユーモア自叙傳」を掲載されてゐる。
- ▲藤本福道君(川柳人協會名譽會員)は金光教烏丸青年會發行の「みのり」に「信心稽古帳」を執筆されてゐる。

その他

屏風・襖・表装一式

山守表具店

大阪市住吉區阿倍野筋三丁目七三
電話 戎五五六〇番(呼)

表装の好期を失はぬやう!

御一報下されば直にお伺ひ致します

(12)昭和七年十二月

(495) 熊澤 車山

- (1)熊澤庸光 (2)車山・梨花莊
- (3)明治三十五年三月二十八日生
- (4)東京市澁橋區 (5)東京市蒲田區御園町三三八 (6)洋裝業 (7)孝行をしてくれ相に子の寢顔(懷窓)百兩をほごげば人をしざらせる(古川柳) (8)蹄宅した女給の地聲人の親。女房を叱り子供の腫と出合ひ (9)野球、映畫 (10)妻、男兒三人 (11)猛犬。食物では別段なし (12)大正六年頃

(496) 石手向上庵

- (1)石手直義 (2)向上庵 (3)明治三十八年九月十日 (4)松山市末廣町二丁目 (5)今治市東門通一四六〇 (6)洋服の御注文なら御伺ひ致します (7)早いこ一本頼む空模様(紳樂) (8)柳誌記載句全部 (9)川柳以外なら仕事する事 (10)妻有。子供三人(11)女房の好きな副食物何もかも

市電に乗つた時に、いつも思ふことであるが、運轉手の右横手に、

不可侵線
接觸線嚴守

の警告文字が書かれてあり、左横手には

等隔運轉勵行の文字がある。

いかに役所の經營らしい堅苦しい文字ではあるが、漢字の持つ妙味と云ふものを遺憾なく發揮してゐると思ふ。もつと簡単に誰にでも列るやうに書いた方がよかりさうに思ふが、さうアツサリさば行かぬらしい。由來役人さ云ふものは、いかなる場合でも威嚴さ

川柳指導講座

本誌の指導講座は平易懇切、全く手を取らなばかりにしての講座振りです。川柳を作りたいが、どうしたらいかと迷つてゐる閑に、五七五中心に、課題によつて作り、本講座へ送られるが捷徑です。講師はこの道の苦勞人、塚越正光先生です。

講師 塚越 正光氏

課題 「女 親」一人一句

締切 十二月一日

投句 本社宛「川柳指導講座句稿」を

明記する事

さ見ていゝだらう。

×

努力と同情さいふものは古い

言葉で云へば車の兩輪だと思ふ

本誌も夏から秋へ、秋から冬へ

かけて、超努力さいふガンバリズムを發揮したところ、その血みどろの眞剣振りには多大の同情を喚起し得たものと見え、投句の如きも日を遡うて殖えて来る。この調子では現在の郵便受を何んさかしなければならぬ日がさう遠くばあるまいと、ひそかに微笑笑を洩らしてゐる。

雨の校正は、何んさなくうそ寒い。私にさつて今日位忙しい日はない。私はこれから姪の結婚式へ臨まればならぬので尻を半分椅子からうけてこの埋草を

×

書いてゐる。あさは萬事機見女が引受けてくれることになつたしかし、いつもより五日も早く刊行出来たことはひさり私だけのよろこびではない。(路)

(12)昭和十一年七月伊豫新報投句

(497) 尾藤 三笠

- (1)尾藤次郎 (2)三笠 (3)明治卅八年七月廿四日生 (4)東京市神田須田町廿七 (5)荒川区三河島町四ノ三三一四 (6)旅籠業 (7)秋の雨ハカキ一枚來すに喜れ(花川洞) (8)見馴れない下駄に女房裏へ来る 位のもの (9)柔道現四段 (10)妻あり子供二人 (11)困つたことに野菜物 (12)大正八年五月頃

前號正誤

午前二時我家の月にも遠慮して丸島利生 (二十一頁)

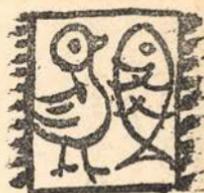
口髻を落すお客へ念を押し

(四十六頁)

Bランチ トマトの色が未熟な

り

(四十九頁)



横 縦 輯 編

▼菊日和の明るさを机に向ふ。行樂も何もあつたものではない。すべては晝夜兼行である。ただ、一日も早く諸君の机上へ本誌を運びたい一念で一ぱいである。切に御愛讀を乞ふ。

▼古川柳研究の至寶「武玉川二篇研究」が本誌で終了した。右研究について異説のある人々、疑問を持つ人々、誤謬、誤植を發見された人々、其の他意見のある人々は至急御寄稿ありたい。次號には

それ等の記事を掲載して研究を一層完璧のものにしたいと思ふ。

なほ「武玉川三篇研究」は新春特輯號から續載して愛讀者の渴を醫する事にする。

▼前號の發送をすまし、揮毫の

筆を投げた私は十六日の夜行で飯川支部十周年記念川柳大會へ出席するため山陰の今市まで出かけた。時は秋爽やかな十月の十七、十八日は休日が二日纏くので汽車は文字通り立錐の餘地がない辛じて席を獲得したが、ロクに眠れないので今市へ着くなり、錢湯に出かけた。錢湯を出て街をすこし歩いてから會場にあてられた宿に歸つて三十分ほどサト／＼した。

▼多年支部の面倒を見て来た縁之助君は今日の喜びを一人で背負つて立ち大車輪で他の幹事諸君を督勵してゐる。十七日がおまりに快晴なのさ、二日纏きの休日であるため、柳人の足が他へ外ればしないかと思慮してゐるさまが氣の毒な位だつた。多少さうした影響はあつたが、それでも伯耆支部の美笑君、松江支部の山川兒君等の顔も見え大盛會裡に終了した事は大なる喜びであつた。

▲「一路集」の作品に作句獎勵の意味から粗品を贈呈する事にしたが、本誌でその第一回の作品を發表した。

▼本誌からいよ／＼「川柳塔」を復活させることにした。これは従来の制度よりは少しく異なつて川柳人協會の役員諸君で「近作柳樽」へ出句するだけで發表することの出来ない多作家のために設けられたものである。たとへ役員であつても算作家の作品は「川柳塔」には載らないうが、作品に選庭がある譯でなく、又選句に手心がある譯でもない。

▼高須啞三味君と福田山雨樓君との柳誌合評「燈火に語る」が航空便で届く。辛じて一部の組み變へによつて掲載することが出来た。これこそ航空便を値打けた譯だ。兩君の勞をよるこぶ

▼例年の忘年大會が本年も京阪神の支部幹事の手で盛大に舉行されることになった。この會に出席してから、川柳が忘れられないものになつた人々が可成多

い。逡巡してゐるは會句へ出る日を永久に失つてしまふものである。こんな機會に出て来て會にも人にも馴染んで欲しい。

▼早いところでは十一月號で本年の納刊號としたところもあるが、本誌では本年中にまだ十二月號と新春特輯號を送り出す豫定である。従つて寄稿も投稿もその積りで、ビシ／＼送りつけていただきたい。最近原稿の乗り遅れが多いので氣の毒だとは思ふが、手心をしてゐては發行日に影響するので用捨なく締切ることにした。悪しからずお容しが願ひたい。

▼又川柳家各位の年賀廣告の掲載申込みを願ひする季節になつた。平素御支援を仰いだ上に年賀廣告で又々御無理を申上げる事は心苦しいが御後援の意味でたさへ一口でも申込んでいただきたい。各位にとつて一口位は何んでもない金額で、寧ろ手数の方が多いのであるが、社にさつては新春號發行費にあてる財源として可成大きな役割を果してゐるのであるから、特に御手數をお願ひする。(路郎)

御手數をお願ひする。(路郎)

（順はろい） 川柳雜誌社關係人々



社主 麻生路郎

川柳雜誌社

顚藤藤國長長長田嘉笠片岡大長池
 原本村枝野岡崎中納原岡本道谷澤助
 退卯之史晴半柳辰純生方平弘川樂
 藏助作耶濱耶秀二純生方平雄徹居

赤井清司
 末弘殿太郎
 伊藤彦造
 鳥山一步
 沖野岩三郎
 大島濤明
 大谷五花村
 大西長三郎
 岡田三面子
 小川武
 龜井晟修
 川上三太郎
 川村花菱

米村あん馬
 田村孝之介
 谷脇・素文
 生方敏郎
 高尾亮雄
 窪田銀波樓
 安川久流美
 前田雀郎
 前田五健
 食満南北
 柴谷幸二郎
 篠原春雨
 姪子省二
 藤里好古
 小林不浪人
 森東魚

支 部 と 幹 事

道頓堀支部(大阪市)	九三會支部(大阪市)	神戸支部(神戸市)	函館支部(函館市)	高知支部(高知市)	梅田支部(大阪市)	釜ヶ池支部(大阪府)	田邊支部(和歌山)	釜ヶ池支部(和歌山)	京都市支部(京都市)	鳥取支部(鳥取市)	松山支部(松山市)	御旅支部(大阪市)	天王寺支部(大阪市)	鶴町支部(大阪市)	御池橋支部(大阪市)	松江支部(松江市)	大鐵局支部(大阪市)	西條支部(愛媛縣)	光耀會(大阪市)	今里支部(大阪市)	上町支部(今治市)	光笑會(大阪市)	伯耆支部(鳥取縣)	竹原支部(廣島縣)	十三支部(廣島縣)	臺中支部(臺南市)	兵庫支部(神戸市)	
幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事
庄萬よし	北山悟郎	喜多春秋	國澤修	水谷春水	辻流介	社左馬	明石柳次	中島鐵州	江戶みづる	須崎豆腐	宮岡白峰	西川いん	勝谷山川兒	荒井英賀夫	竹内機見女	市塙没會子	廣原都會人	月原宵明	永田里十九	三嶋美笑	松井可笑	宮内陽幸	淺野牧人	宮内陽幸	宮内陽幸	宮内陽幸	宮内陽幸	

投稿規定

- ▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。
- ▲「川柳塔」への投句は川柳人協會の役員に限る。
- ▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事
- ▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
- ▲書體はなるべく隨書「川柳雜誌原稿」を封筒に朱記の事
- ▲締切は嚴守されたし。
- ▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

募 集

第十四卷 第二號懸賞課題

十二月五日締切

(十句以内)

腕力 西村明珠 選

第十四卷 第三號懸賞課題

一月五日締切

(十句以内)

窓口 森雞牛子 選

女將 麻生葭乃 選

每 號 募 集

近作柳樽(雜吟) 麻生路郎 選

各地柳壇(會報)

文章(評論研究感想吟行漫文漫畫)

懸賞句規定

- ▼天地人三位に粗品を呈す
- ▼一般應募歡迎

價 定

一 部 金三十錢
 中箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
 一箇年前金(特輯號共)三圓六十錢

料 告 廣

本誌への廣告に就いては發行所へ直接御一報下さいませすれば御相談に應じます。

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誦代受領は送本によつて御承知願ひます○送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金下さい○御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます。但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます○御注文には何月號よりご御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十一年十一月十日印刷

昭和十一年十一月十五日發行

第十三卷 第十一號
(毎月一回十五日發行)

無 禁 轉 載
 編輯兼發行印刷人 麻生幸二郎
 大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

川柳雜誌社

發行所 大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
電話 天下茶屋二五七九番
攝替 大阪七五〇五〇番

支社 東京市蒲田町女塚町二〇三
 川柳雜誌社東京支社

店書捌賣

(大阪)大賣捌大寶書店 參文社 明文堂 其他 市内各書店
 (東京)丸の内東京堂 丸の内嚴松堂 丸の内吉岡書店 丸の内玉森堂 丸の内純伊
 國屋 丸の内三味堂(神戶) 米田、寶文館(函館) 石塚(京都)
 三宅(名古屋) 靜觀堂

柳人年賀廣告

柳人に限つて特に低額の年賀廣告をお取扱ひ致します。御後援の意味で御参加下さい。

▼廣告掲載料 一口金一圓

幾口でも申込んで下さい、一口分原稿はなるべく簡単に願ひます。

申込期限 十二月十日 (厳守)

(新春特輯號に掲載)

川柳雜誌社

振替穴阪七五〇五〇番

川柳人協會

振替穴阪三一五一四番

▼一頁御希望の方は特に御相談申上げます

▼廣告申込は成るべく振替御利用の上前金でお願ひ致します(三錢以下の切手代用差支ありません)

麻生路郎編著・柴舟漫畫

累卵の遊び

定價 八圓
送料 拾六錢

四六版一六〇頁・函入・漫畫三十二葉
川柳の妙味を骨を折らずに味つて貰ふつもりで嚙んで砕いて擲り餌にしたのが「累卵の遊び」であるとは著者の序文の一節である。

阪大川柳會編纂・路郎序

川柳 大川端

頒送價 壹圓
郵費 六錢

大阪帝國大學の中で生れた異色ある川柳句集である。(四六版二〇〇頁)
本句集は非賣品であるが阪大川柳會に請ふて特に川柳愛好家のため頒布することにした。残本僅少至急申込みあれ!

橋本綠雨著
麻生路郎序

川柳 街の雑音

定價 五圓
送料 四錢

☆作家生活十三年、黙々として吐き出した著者そのままの生きた姿、一讀再讀人生の底邊に觸るるものあらん。敢て薦む。

發行所

不 朽 洞

振替 三〇三〇三
電話 二下 七五九

大阪 市 西區 玉出
本通 三丁目 六

川柳人協會 にお入り下さい

川柳人協會はホントの川柳を社會に弘く知らせるためと、川柳愛好者がお互ひに仲よく手を繋ぐために生れた横の運動をするのが目的です。従つて協會の總會は全國各地で次ぎ／＼に開會され、斯界の大家が出席して講演や句作によつて向上發展を期する一方、相互の親睦を圖る機會を作りたいと思つて居ります。川柳人協會が主體となり各地吟社の共同後援で大會なども開きたいと存じます。會員は毎月「川柳雜誌」といふ柳誌を配布される外諸會合に際しては會の性質により入場料の割引又は免除其他いろ／＼の特典を受ける権利を持つて居ります。入會は誰でも何時からでも出来ます。申込書に會費一ヶ年分三圓、半ヶ年分一圓六十錢を添えて協會へお送り下さい

れば正會員章をお届け致します。送金は振替（大阪三一五一四）を利用して下されば一番安全ですが、小爲替か郵券（二錢以下）でも結構です。御友人にもおすすめ下さい。

（川柳人協會と川柳雜誌社とは別個の存在でありますから混同されないやうお願いいたします）

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

川柳人協會

理事長 麻生路郎

電話 天下茶屋二五七九番
振替 大阪三一五一四番

◆今までに「川柳雜誌」を月極又は半ヶ年極で購讀してゐられる方で入會を希望される方は更に一ヶ年又は半ヶ年分の協會費を前納されれば、残存諸代の月數だけ延長して正會員章を送り其の月から正會員の資格が出来ます。

切取線

川柳人協會入會申込書

住所 市 區 町 丁目 番地

雅號 職業

會費 年分前納の上入會申込みます

川・雑・案・内

六號活字十四字三行金五十錢、一行増すこと
 下に金十錢（但し前金切手代用可）
 改題、郵購、句會案内、御書廣告、その他

路郎先生築筆

路郎先生筆、掛軸、横額小物、短冊を川柳家に限り左の通りで頒布致します

軸箱入 貳拾圓・額 貳拾圓
 小物 五圓・短冊 參圓
 御申込は前金で發行所へ

投句用箋

川柳雜誌投句用箋の昭和十一年度新製が出来ました。投句には本社正規の此用箋を御使用下さい。

五十枚綴 二冊 金十二錢（送料共）
 御申込は川柳雜誌社へ
 〓切手代用も可〓

御禮

川柳雜誌社

麻生路郎

島根・鳥取川柳人各位
 鎌川支部同人各位

合本特賣

川柳雜誌の合本第二巻より第十巻まで

各一卷 金壹圓五十錢
 第十一巻及第十二巻 金參圓
 送料大阪市内 一冊六錢
 市外 一冊廿四錢
 御申込は前金で川柳雜誌社へ

後の葉柳を頒つ

大正八年に出してゐた「後の葉柳」の残本が僅かばかり出て来たのでお頒ちします。日車、牛文錢、路郎の三氏の句しか載つてゐない樹形四頁もの全三部で十錢、二錢切五枚お送り下さつてもよろし。

川柳雜誌社宛

發本分讓

川柳雜誌の殘本が少數宛ありますので、左の通りで分讓申上ます

第二巻より第三巻迄 一冊 十五錢
 第四巻より第十一巻迄 一冊 二十錢
 第十二巻 一冊 二十錢
 （送料一冊一錢）
 御申込は前金で川柳雜誌社へ

懸賞川柳

課題「牛」十二月十日
 用紙は官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事） 選者麻生路郎氏
 秀逸數句に薄謝を呈す
 宛先 大阪市西成區玉出本通三ノ三六 麻生路郎氏方
 化粧新聞社柳壇へ

川柳を作る人、愛好する人の必讀誌

川柳俱樂部

毎月一日發行
 一部廿錢・送料一錢
 東京市牛込區拂方町一四
 川柳俱樂部社

川上三太郎主宰

（毎月一回發行）

川柳研究

一冊 金廿錢
 一年 金一圓
 異色ある本誌の創作欄は初心者への入門欄をアタマは絶對に見逃してはいけません
 見本希望者は二錢切手十枚同封左記へ
 東京市王子區上十條町八五〇
 發行所 川柳研究社

川柳きやり

菊判每號七十數頁
 毎月一日發行 一部廿五錢
 東京豊島區高田本町二ノ一四
 六八
 川柳きやり吟社

大阪の古本屋

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話 南 五 六 二 番

大阪道頓堀

天牛本店

電話南二七四八・二七四九番
振替 大阪 五六六五〇番

大阪市道頓堀筋日本橋南詰東入濱側

天牛第一書房

電話南(75)一五六三番
振替 大阪 七一五四三番

高尾書店櫻橋店

電話北七〇〇七番

大阪市西區南堀江通一丁目

荒木伊兵衛書店

支店 朝日ビル二階専門大店

大阪市南區西清水町八番地

石川清和堂

電話 振替 大阪 七三五八一番

大阪市南區八幡筋

杉本梁江堂

電話 南 二一六番

大阪市北區櫻橋交叉點

櫻橋だより

毎月刊行

カズチ書店

電話 北 七五六五番

酒 白鶴 清

ハクツル

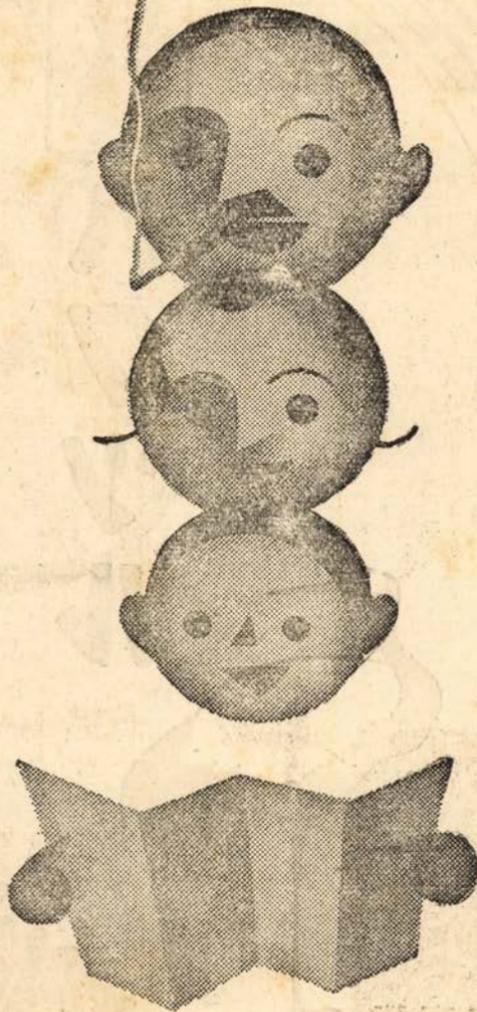


元壺發

社會名合納嘉

天奉・連大・川仁・城京・戸神・京東・阪大

たしかな保険・たのしい家庭！



日本生命

(營業案内贈呈)

大 阪 ・ 今 橋

獎推 士博學醫林檜
 査監 士博學醫瀨片

錠ムーユシルカダワ



母性愛の達成へ

母性愛の發露たる妊娠は眞に女性にとつての重大任務であります。更にこれを達成せしめることはワダカルシユームの使用であります。即ち母体と胎兒の保護榮養に任じ、懸阻期を安全に経過せしめ、偶發する諸病を未然に防ぎ、子宮の收縮をよくする爲め安産せしめます。お産の守護神として御信任を頂いてゐます。更に授乳期には、母乳を豊富にし、乳質を改善する外、母体の容貌、毛髮、齒牙の悪化を防止し、乳兒も随つて健やかに育成されますから、凡ゆる女性を朗かな圓滿な家庭の人とします。

片瀨醫學博士述「安産のために」進呈

代時ムーユシルカ
 てし設建を

茲に二十年、幾十萬の妊娠婦諸姉が、「ワダカルシ」の偉力を禮讃せられつゝある事實と、我國カルシユーム學界の泰斗、大阪醫大教授片瀨博士の、二十年一日の如き熱意と努力により、不滅の城域を築き得ました事は、弊店最大の誇とする處であります。

安産！安産！安産のために
 「ワダカルシユーム錠」



大正十三年三月三日...
昭和十一年十一月十日...
昭和十一年十一月十五日...
昭和十一年十一月二十日...

川柳雜誌 (第一五〇號)

定價金參拾錢 送料壹錢

紅葉と溪流のきし

牛滴山

大割引(電車・バス共)

難波・住江間各驛より一四四八錢
和歌山市驛より 一四八八錢

宴 造 宗

難波より 二四三〇錢
和歌山市より 二四七〇錢

お序でに葛城縦走コースの
ハイキング難波より一四六五錢

紅葉の名所

延命寺 高野山
観心寺 紅葉谷
天野山 犬鳴山

南海電車